茨城県常陸大宮市

岡　原　遺　跡

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市

岡原遺跡（おかはらいせき）

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

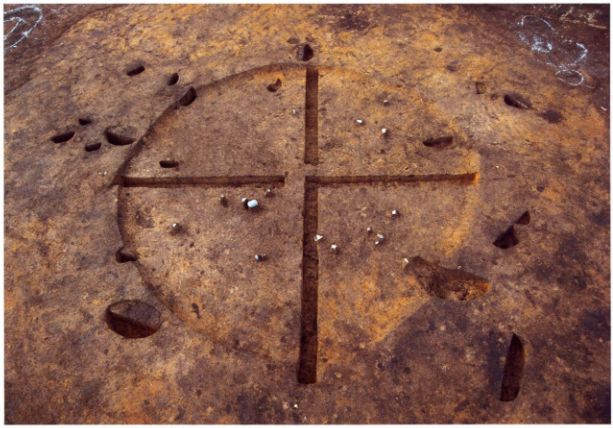
2011

常陸大宮市教育委員会

遺跡全景（南東上空から）

遺跡全景（北西上空から）

調査区全景（北上空から、南側と北側の写真を合成）



SI07 遺物出土状況（南東から）

SI07-12 出土状況

SI07-7 出土状況

SI07-15 出土状況

SI07-14 出土状況

「因」（異体字）

SI03-2

（画像処理済み）

「真田」（「田」は異体字、朱墨）

SI06-11

人面
＋
「□□□鳥［　］」

SI08-1

（可視光線撮影）

（赤外線撮影）

「□女」

SI08-6

※ SI08-1 は S＝1/4、他は S＝1/2。

出土した主な墨書土器

序

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し、北側は栃木県那珂川町と茨城県大子町に、西側は栃木県茂木町と同那須烏山市に、南側を城里町と那珂市に、東側を常陸太田市にそれぞれ接しています。市の総面積は348.38㎢であり、その6割を森林が占めています。

市域の東側には、鮎の釣り場で有名な清流久慈川が流れ、西南側にわが国で最初に鮭の人工放流を行った那珂川が流れています。さらに中央部は、久慈川の支流玉川と那珂川の支流緒川が流れ、市域は発達した肥沃な河岸段丘と丘陵上に概ね位置しています。西北部には、八溝山地の一つ鷲子山塊があり、全体的には北部が高く、南部ほど低くなる傾向を示しています。

このように豊かな自然に恵まれた常陸大宮市には、旧石器時代から中・近世に至る多くの遺跡が存在しており、なかでも旧石器時代の山方遺跡、翡翠製大珠が多数出土した縄文時代の坪井上遺跡、人面土器が検出された小野天神前遺跡・泉坂下遺跡など、全国的にも著名な遺跡も多く存在しております。

今回は中山間地域総合整備事業に伴い、御前山地区の岡原遺跡の一部が開発されることになりました。そのため、開発事業に先駆けて埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図りました。

その結果、遺跡内からは、縄文時代早期の竪穴住居1軒を初めとして、奈良・平安時代の住居が多数検出され、集落を形成してきたことが判明しました。さらには、中世の地下式坑や近世の土坑墓等様々な遺構が検出され、遺構からは多くの土器・石器・鉄器などが出土しました。

これらの貴重な資料は、ふるさとの文化を知る重要な文化遺産であり大切に保存され、文化財保存保護の精神向上や郷土の文化を培う上で郷土資料として役立てていただければ幸いであります。

郷土の歴史を知り、後世に伝えていくことは、現代を生きる私たちの責務であるものと考えます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり文化財保護の立場からご指導いただきました茨城県教育庁文化課、水戸教育事務所の関係者、ならびに茨城県北農林事務所、常陸大宮市役所農林課、地権者の皆様に心から篤く感謝申し上げ、序といたします。

平成23年３月

茨城県常陸大宮市教育委員会

例　言

1　本書は、茨城県常陸大宮市門井 79 番地の１ほかに所在する岡原(おかはら)遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、中山間地域総合整備事業に伴う事前調査として行ったもので、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、常陸大宮市から委託を受けた株式会社ノガミが実施した。発掘調査面積は 7,752 ㎡である。

3　発掘及び整理調査期間は下記のとおりである。

　発掘調査　　平成22年10月18日～平成23年１月７日

　整理調査　　平成23年１月９日～平成23年３月22日

4　発掘調査は、常陸大宮市教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。

　調査指導　　後藤俊一・鴨志田篤二（常陸大宮市教育委員会）

　主任調査員　　湯原勝美（株式会社ノガミ）

　調査員　　秋山泰利（株式会社ノガミ）

5　整理及び報告書作成に係る作業は、常陸大宮市教育委員会の指導・監督のもとに、湯原勝美と秋山泰利が担当した。なお、出土遺物の整理・執筆については秋山が中心となって行った。

6　本書の執筆は、湯原勝美、秋山泰利、後藤俊一があたり、編集は湯原が担当した。執筆分担は下記のとおりである。

　第１章１…後藤、第１章２…湯原、第２章…湯原、第３章１・２…湯原、第３章３…湯原・秋山、第４章…湯原・秋山

7　墨書土器の判読については、国立歴史民俗博物館の平川　南・武井紀子氏にご教示いただいた。また、朱墨書土器（朱黒部）の蛍光Ｘ線分析については同館の永島正春氏にご協力いただいた。

8　出土遺物及び記録類は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

9　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なるご教示・ご協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

　川崎純徳　後藤一成　小林昌二　土生朗治　横倉要次

　茨城県教育委員会　茨城県県北農林事務所　一般社団法人常陸大宮市シルバー人材センター

凡　例

1　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北（平面直角座標Ⅸ系、原点方位の北）を示す。

2　調査区には、公共座標にもとに10m方眼のグリッドを設定した。北西隅を基点（平面直角座標Ⅸ系X=63440、Y=44730）に、東西方向は西から算用数字を付し、南北方向は北からアルファベットを付して「A1」のように組み合わせてグリッド名とした。

3　本書では、現地調査時に付した遺構番号をそのまま遺構名称として使用した。

4　遺構番号は、種別ごとに通し番号とした。使用した遺構種別の略称は下記のとおりである。

SI…竪穴住居、SB…掘立柱建物、FP…屋外炉、SE…井戸、
SK…土坑・地下式坑・粘土貼り土坑・土坑墓、SX…竪穴状遺構、SD…溝

4　土層と土器の色判定には『新版 標準土色帖』〔小川・竹原2002〕を使用した。

5　遺物実測図のうち土器の口縁残存率が8/36以下のものは中心線と左右の図を離して図化した。

6　遺物観察表に記載した計測値のうち、推定値には［ ］、残存値には（ ）を付して示した。

7　土器の胎土中混入物については、長石を「長」、石英を「石」、雲母を「雲」、海面骨針を「骨」、小礫を「礫」、赤褐色粒子を「赤」、黒色粒子を「黒」と略記し、特に多いものについては「多」と表記した。また、粒径2mm以上のものを小礫として区別した。

8　遺物写真の縮尺は遺物実測図とほぼ同じであるが、それ以外のものについては遺物番号の後ろに括弧で縮尺を示した。

9　遺構・遺物実測図にドットやスクリーントーン等を使用したが、その内容は以下のとおりである。

目　　次

第1章　調査経緯……1

1　調査に至る経緯……1

2　調査の経過（口誌抄）……1

第2章　遺跡の位置と環境……2

1　地理的環境……2

2　歴史的環境……2

第3章　調査の成果……5

1　遺跡の概要……5

2　基本層序……6

3　遺構と遺物……11

A　縄文時代……11

1）竪穴住居……11

2）土　坑……11

3）屋外炉……11

B　奈良・平安時代……15

1）竪穴住居……15

2）掘立柱建物……34

C　中　　世……35

1）地下式坑……35

D　近　　世……43

1）土坑墓……43

E　時期不明……49

1）井　戸……49

2）粘土貼り土坑……49

3）土　坑……49

4）竪穴状遺構……50

5）溝……55

第4章　ま　と　め……60

引用・参考文献

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　岡原遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第 2 図　調査区設定図……5
第 3 図　基本層序図……6
第 4 図　土層観察用試掘坑の位置図……7
第 5 図　土層柱状図（1）……7
第 6 図　土層柱状図（2）……8
第 7 図　遺跡全体図……9・10
第 8 図　SI07 実測図・出土遺物……12
第 9 図　SK28・FP01 実測図・出土遺物……13
第 10 図　遠構外出土遺物……13
第 11 図　SI01 実測図……16
第 12 図　SI01 出土遺物……17
第 13 図　SI02 実測図……19
第 14 図　SI02 出土遺物……20
第 15 図　SI03 実測図・出土遺物……22
第 16 図　SI04 実測図・出土遺物……23
第 17 図　SI05 実測図……24
第 18 図　SI06 実測図……25
第 19 図　SI06 出土遺物……26
第 20 図　SI08 実測図・出土遺物……28
第 21 図　SI09 実測図……29
第 22 図　SI10 実測図・出土遺物……30
第 23 図　SI11 実測図・出土遺物……31
第 24 図　SI12 実測図……32
第 25 図　SI13 実測図・出土遺物……33
第 26 図　SB01 実測図……34
第 27 図　SK05・10 実測図……36
第 28 図　SK12・13 実測図……37
第 29 図　SK14・15 実測図……38
第 30 図　SK16・17・23 実測図……39
第 31 図　SK18 実測図・出土遺物……40
第 32 図　SK26・27 実測図……42
第 33 図　SK02・03・04 実測図・出土遺物……44
第 34 図　SK07・19 実測図・出土遺物……45
第 35 図　SK20・21 実測図・出土遺物……46
第 36 図　SE01・SK01・06・08 実測図・
　出土遺物……51
第 37 図　SK09・11・22・24 実測図……52
第 38 図　SK25・29・30 実測図・出土遺物……53
第 39 図　SX01・02・03 実測図・出土遺物……54
第 40 図　SD01・02 実測図……56
第 41 図　SD03 ～ 07 実測図……57
第 42 図　SD08 実測図……58
第 43 図　「野山村大字門井字光堂」の範囲……62
第 44 図　地下式坑の主軸方向……62

表 目 次

表 1　周辺の遺跡一覧表……4
表 2　SI07 出土遺物概察表……14
表 3　SK28 出土遺物概察表……14
表 4　遺構外出土遺物概察表……14
表 5　SI01 出土遺物概察表（1）……17
表 6　SI01 出土遺物概察表（2）……18
表 7　SI02 出土遺物概察表……21
表 8　SI03 出土遺物概察表……22
表 9　SI04 出土遺物概察表……24
表 10　SI06 出土遺物概察表……27
表 11　SI08 出土遺物概察表……28
表 12　SI10 出土遺物概察表……31
表 13　SI11 出土遺物概察表……32
表 14　SI13 出土遺物概察表……33
表 15　SK18 出土遺物概察表……41
表 16　SK02 出土遺物概察表……47
表 17　SK03 出土遺物概察表……47
表 18　SK04 出土遺物概察表……47
表 19　SK07 出土遺物概察表……47
表 20　SK19 出土遺物概察表……47
表 21　SK20 出土遺物概察表……47
表 22　SK21 出土遺物概察表……48
表 23　SK01 出土遺物概察表……55
表 24　SK29 出土遺物概察表……55
表 25　SK30 出土遺物概察表……55
表 26　SX01 出土遺物概察表……55

写真図版

巻頭カラーPL 1　遺跡全景
巻頭カラーPL 2　調査区全景
巻頭カラーPL 3　SI07遺物出土状況
巻頭カラーPL 4　出土した土師器

PL 1　調査区南側全景、調査区北側全景
PL 2　SI07、SK28、FP01
PL 3　SI01
PL 4　SI02
PL 5　SI03～05
PL 6　SI04・05
PL 7　SI06
PL 8　SI08・09
PL 9　SI10
PL10　SI11・12
PL11　SI12・13、SB01
PL12　地下式坑群全景
PL13　SK05・10・12・13
PL14　SK13～18・23
PL15　SK16～18・23・26・27
PL16　SK02～04
PL17　SK07・19・20・21
PL18　SK01、SE01、SK06・08
PL19　SK09・11・22・24・25
PL20　SK25・29・30、SX01・02
PL21　SX02・03、SD01・02
PL22　SD03～08
PL23　TP01～06
PL24　縄文時代の出土遺物
PL25　奈良・平安時代の出土遺物
PL26　奈良・平安時代の出土遺物
PL27　奈良・平安時代の出土遺物
PL28　奈良・平安時代、中世、近世の出土遺物
PL29　近世の出土遺物

第1章　調査経緯

1　調査に至る経緯

本発掘調査は、中山間地域総合整備事業に伴う事前調査である。

平成21年5月18日に茨城県県北農林事務所部門長　川久保　隆から常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会が提出された。それに基づき、市教育委員会は同年10月28日～30日、11月2日～4日に事業予定地内に試掘調査を実施した。調査はトレンチ方式で行い、試掘の結果は竪穴住居跡・ピット・溝状遺構・土器片等が検出され、古代の集落が所在することが判明した。

平成22年1月17日、茨城県教育委員会との協議により、本調査を実施することとなり、その後入札により、株式会社ノガミに調査依頼を行う。

平成22年9月17日、常陸大宮市教育委員会・常陸大宮市・株式会社ノガミは三者協議を行い、確認調査の結果に基づき平成22年10月18日から平成23年1月7日まで本調査を実施した。

2　調査の経過（日誌抄）

本遺跡の発掘調査は、平成22年10月18日から平成23年1月7日の約2.5か月間にわたって実施した。調査に先立ち、常陸大宮市教育委員会と茨城県県北農林事務所との協議の結果、調査区を南北に分けて南側から調査を行うことになった。調査区の南側は、先行して12月21日にすべての作業を終了した。

10月　6日、発掘調査の準備を開始する。7日、ユニットハウス・仮設トイレの設置、駐車場の鉄板敷きなど作業環境の整備を行う。18日、重機（バックホウ）を使用して南側から表土除去を開始する。22日、人力による遺構検出作業を開始する。25日、公共座標の取り付け。25日、調査区南側の表土除去を終了。調査区南側の中央から南東端にかけては谷状の地下地形を呈しており、遺構確認面までの深さは2～3mであった。引き続き、北側の表土除去を行う。

11月　8日、調査区南側から遺構調査を開始する。調査区南側の中央付近から中世の地下式坑と見られる大壁の遺構を複数検出した。11日、表土除去を終了する。

12月　1日、調査区北側の遺構調査を開始する。5日、調査区南側の空撮。10日、調査区南側について発掘調査の終了確認を得る。13日から調査区南側の埋戻しを開始し、21日に終了する。15日、土層観察用の試掘坑（TP01～03）を重機で掘削する。基本層序の実測を終了し、調査区南側の調査をすべて終了する。21日、常陸大宮市の市長・副市長、市議会議長による遺跡視察。23日、地元関係者を対象に現地説明会を開催。約60名が来跡する。24日、常陸大宮市の文化財審議委員による遺跡視察。24日、遺構の掘り下げを終了。27日、調査区北側の空撮。遺構実測を終了。遺構調査を終了する。28日、調査区北側について発掘調査の終了確認を得る。年内の作業を終了する。

1月　5日、年明けの作業を再開する。土層観察用の試掘坑（TP04～06）を重機で掘削する。6日、基本層序の実測終了。器材等後片付け。12日、ユニットハウスなどの撤収を開始し、14日に終了する。5日から調査区北側の埋戻しを開始し、7日に終了する。7日、常陸大宮市教育委員会と茨城県県北農林事務所が立ち会い、現地で終了確認を行う。現地調査をすべて終了する。

第２章　位置と環境

１　地理的環境

岡原遺跡は、茨城県常陸大宮市門井79番地の１ほかに所在する。

常陸大宮市は、茨城県の北西部に位置し、西側は栃木県との県境に接している。市の東部には久慈川が、市の南西部には那珂川が流れる。市街地は市の南東部にあり、点在する集落付近を除き、それ以外の地域は主に山林となっている。

本遺跡は、那珂川の支流である緒川の右岸河岸段丘上に立地する。遺跡の東側には緒川が蛇行しながら南流し、約2.6㎞下流で那珂川に合流している。遺跡が立地する段丘面は、西側（山側）を除く三方が段丘崖となり、緒川が流れる東側に向かって舌状に張り出した地形となっている。同段丘面は、西側から南東側に向かってわずかに傾斜しているが、現況ではほぼ平坦な地形を呈する。同段丘面の標高は62～67mで、東側の段丘崖下の段丘面との比高は約13mである。

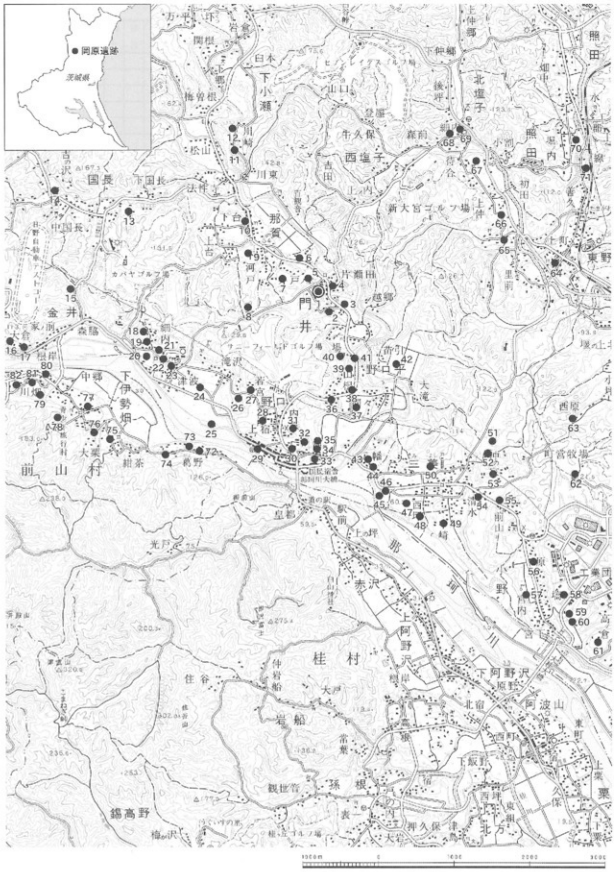
２　歴史的環境

ここでは、本遺跡に関連する縄文時代、奈良・平安時代、中世を中心に市内の遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡は、早・前・晩期の遺跡は少なく、中・後期の比較的規模の大きな遺跡の分布が目立つ。久慈川右岸の坪井上遺跡、宮中遺跡、那珂川左岸の小野天神前遺跡（56）、西塙遺跡（28）、高ノ倉遺跡などが代表的な遺跡で、中でも小野天神前遺跡は早・中～晩期と長期にわたって営まれており、弥生時代中期前半まで継続した県内でも有数の遺跡である。坪井上遺跡では、中期の竪穴住居19軒、土坑75基が確認されており、特筆すべき遺物として硬玉製大珠８点が出土している。西塙遺跡では、中期の竪穴住居１軒、有段竪穴建物４軒、土坑152基が確認され、大型のフラスコ型土坑から火炎土器が１点出土しており注目される。また、本遺跡からもメノウを素材とした石器がいくつか出土しているが、養老年間ころの成立といわれる『常陸風土記』久慈郡の条には、久慈川の支流である玉川からメノウが産したことがすでに記されている。

奈良・平安時代の遺跡は多いが、このうち文字資料が得られている主な遺跡には次のようなものがある。久慈川の右岸にある鷹巣遺跡では、８世紀から10世紀にかけての竪穴住居32軒、掘立柱建物２棟が確認されており、「桑弘」・「高倉」・「西□」などの墨書土器が出土している。また、同遺跡の台地斜面部には約10基の瓦窯からなる鷹巣瓦窯跡群の存在が確認されている。久慈川の支流である玉川右岸にある小中遺跡では、９世紀から10世紀にかけての竪穴住居24軒が確認されており、「丈」・「曽」・「郷」・「千万」・「六万」・「方合」などの墨書土器、「丈」の字の烙印などが出土している。那珂川の左岸にある小野中道遺跡（57）からは、「丈永私印」と陽刻された飼印や、「□□里丈部里」と箆書きされた平瓦などが出土している。同じく源氏平遺跡（59）では、８世紀から９世紀にかけての竪穴住居17軒が確認されている。「□鳥取文功」・「鳥部嶋」と箆書きされた平瓦や、「土垣倉」と墨書された高台付坏の中から「解」の文字が記された漆紙文書などが出土しており、丈部氏に関連した集落であると考えられている。

中世では、那珂川とその支流である緒川の流域に、部賀遺跡（10）、川崎城跡（12）、川野辺城跡（野口城跡）（35）、新京寺（野口平）城址（40）、高ノ倉城跡（61）、要害城跡（78）などの城館跡が点在する。



第１図　岡原遺跡の位置と周辺の遺跡

（国土地理院『常陸大宮』1:50,000（平成 15 年４月発行）に加筆）

表1　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
1	岡原遺跡	集落跡		○		○	○		
2	片セ田遺跡	包蔵地					○		
3	下平道祢遺跡	集落跡					○		
4	森前遺跡	集落跡		○			○		
5	清水遺跡	集落跡					○		
6	萩崎遺跡	集落跡		○			○		
7	井戸上遺跡	集落跡		○			○		○
8	包塚古墳	古　墳				○			
9	陣内梶内遺跡	包蔵地		○					
10	那賀遺跡	城館跡						○	
11	川崎遺跡	包蔵地		○		○			
12	川崎城跡	城館跡						○	
13	堂ノ入遺跡	包蔵地		○		○			
14	国長平遺跡	包蔵地		○					
15	金井大平遺跡	集落跡		○			○		
16	大倉山遺跡	集落跡		○			○		
17	大倉遺跡	集落跡	○	○			○		
18	割増遺跡	集落跡		○			○		
19	割増の板碑	その他							○
20	細内西ノ内遺跡	集落跡		○			○		
21	細内東遺跡	包蔵地					○		
22	津波西遺跡	集落跡		○			○		
23	津波東遺跡	集落跡		○			○		
24	上川原遺跡	集落跡					○		
25	高塚塚	塚			（時期不明）				
26	若宮遺跡	集落跡		○			○		
27	若宮戸遺跡	集落跡		○			○		
28	西塙遺跡	集落跡	○	○		○	○	○	○
29	上宿遺跡	集落跡		○			○		
30	内古屋遺跡	集落跡					○	○	○
31	内原遺跡	集落跡		○		○	○		○
32	時雍館址（郷校）	その他							○
33	館遺跡	集落跡					○		
34	御城遺跡	集落跡					○		
35	川野辺城跡（野口城跡）	集落跡					○	○	
36	矢口遺跡	集落跡			○		○		
37	京銭内古墳	古　墳				○			
38	山根遺跡	集落跡		○	○	○	○		
39	樋内古墳	古　墳				○			
40	新京寺（野口平）城址	城館跡						○	
41	成井遺跡	包蔵地					○		
42	中島遺跡	集落跡				○	○		
43	八幡遺跡	集落跡					○		
44	八幡塚	塚			（時期不明）				
45	三美の蓄銭	備蓄銭						○	
46	赤岩遺跡	集落跡		○	○	○	○		
47	三美中道遺跡	集落跡		○	○	○	○		
48	滝ノ上遺跡	集落跡		○			○		
49	中崎遺跡	集落跡		○			○		
50	三美根岸遺跡	集落跡		○		○			
51	泉沢B遺跡	集落跡		○					
52	泉沢C遺跡	集落跡			○				
53	泉沢A遺跡	集落跡		○					
54	一の沢塚群	塚　群							○
55	前山瓦窯跡	瓦窯跡					○		
56	小野天神前遺跡	集落跡		○	○		○		
57	小野中道遺跡	集落跡		○	○	○	○		
58	居合遺跡	集落跡					○		
59	源氏平遺跡	集落跡		○			○		
60	源氏平塚群	塚　群							○
61	高ノ倉城跡	城館跡		○		○	○	○	
62	町営牧場内遺跡	集落跡		○					
63	西原遺跡	集落跡		○			○	○	
64	地蔵神社遺跡	集落跡		○		○	○		
65	仲ノ内遺跡	集落跡		○			○	○	○
66	東野仲坪遺跡	集落跡				○	○		
67	待合遺跡	集落跡		○			○		
68	上小原遺跡	集落跡		○			○		
69	細内遺跡	集落跡		○			○	○	
70	堀の内遺跡	集落跡					○		
71	東原遺跡	集落跡		○			○		
72	中平遺跡	集落跡		○			○		
73	島野遺跡	包蔵地					○		
74	古御所遺跡	集落跡		○			○		
75	大栗遺跡	集落跡					○		
76	下伊勢畑細内遺跡	集落跡		○			○		
77	滝坂遺跡	集落跡		○			○		
78	要害城跡	城館跡						○	
79	大信前遺跡	集落跡		○			○		
80	川畑遺跡	集落跡		○			○		
81	大信遺跡	集落跡		○			○		
82	西原遺跡	集落跡		○			○		

※〔常陸大宮市教育委員会2008〕に基づいて作成。

【引用・参考文献】

井上義安　1987　『常陸鷹巣遺跡－第２次発掘調査報告－』大宮町教育委員会・鷹巣遺跡発掘調査会

小川和博・大渕淳志　2009　『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市・常陸大宮市教育委員会・有限会社日考研茨城

大宮町史編さん委員会　1977　『大宮町史』大宮町史編さん委員会

大宮町歴史民俗資料館編　1995　『町村合併40周年記念特別展　大宮の考古遺物－那珂・久慈の清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代－』大宮町教育委員会

御前山村郷土誌編纂委員会　1990　『御前山村郷土誌』御前山村郷土誌編纂委員会

千種重樹　1999　『常陸大宮坪井上遺跡』坪井上遺跡発掘調査会・大宮町教育委員会

外山泰久　1985　『常陸源氏平－那賀郡阿波郷大部里比定地に於ける集落跡の調査（遺構・遺物）－』那珂郡大宮町教育委員会・水戸北部中核工業団地内埋蔵文化財発掘調査会

常陸大宮市教育委員会　2008　『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図』常陸大宮市教育委員

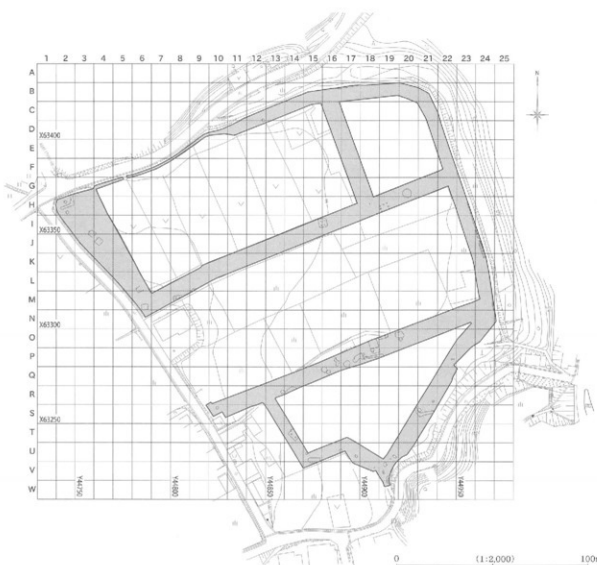
第３章　調査の成果

１　遺跡の概要

本遺跡は、茨城県常陸大宮市門井79番地の１ほかに所在し、那珂川の支流である緒川の右岸河岸段丘上に立地している。遺跡が立地する段丘面は、三方が段丘崖となっており、緒川の流れる東側に向かって舌状に張り出した地形となっている。段丘面の標高は62～67mである。調査は、門井地区の中山間地域総合整備事業に伴い、農道や排水路などの建設予定地7,752㎡について本調査を実施した。

調査の結果、本遺跡からは断続的ながら縄文時代早期から近世に至る遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居１軒、土坑１基、屋外炉１基、奈良・平安時代の竪穴住居12軒、掘立柱建物１棟、中世の地下式坑12基、近世の土坑墓7基、時期不明の井戸1基、粘土貼り土坑１基、土坑10基、竪穴状遺構３基、溝８条である。

遺物は、収納コンテナ（内寸：336×545×200mm）で12箱ほど出土している。



第2図　調査区設定図

2　基本層序

本遺跡は、那珂川の支流である緒川の右岸河岸段丘上に立地している。遺跡の東側には緒川が蛇行しながら南流し、約2.6㎞下流で那珂川に合流している。遺跡が立地する段丘面は、西側（山側）を除く三方が段丘崖となり、緒川が流れる東側に向かって舌状に張り出した地形となっている。同段丘面は、西側から南東側に向かってわずかに傾斜しているが、現況ではほぼ平坦な地形を呈している。標高は62～67mである。

基本層序は、調査区内に土層観察用の試掘坑を６箇所（TP01～06）設定して観察と記録を行った。試掘坑の位置と土層柱状図は第４～６図に示したとおりである。

表土層と黒色土層を除去するとテフラ層の上面となり、各時代の遺構はすべてこの面で検出した。地表面上ではほぼ平坦な地形に見えるが、テフラ層の上面では台地の中央から南東端にかけて谷状を呈する地下地形が確認できる。テフラ層は地形の起伏にかかわらずほぼ一定の層序と層厚で堆積が見られることから、この地下地形はテフラ層が堆積する以前に形成されたものであることがわかる。

関東平野北東部におけるテフラ層の層序は、上位から田原ローム層・宝木ローム層・宝積寺ローム層・戸祭ローム層に区分されているが、当地域では層序区分が判然としないため〔金井ほか1998〕、ここではテフラ層の区分として、最上位の七本桜軽石層・今市軽石層を除き、大まかに鹿沼軽石層より上位（上部ローム層）と下位（下部ローム層）とに区分するにとどめた。

【基本層序】

表土層は、黒褐色を呈する畑耕作土である。

黒色土層は、調査区のほぼ全域で表土層直下に確認できる。本層がもっとも顕著なのは、調査区の南東端、谷状を呈する地下地形の谷口にあたる場所（U19・V19区）で、約３mの厚さで堆積している。本層の成因については判然としないが、旧表土が二次堆積したものである可能性が考えられる。本層の堆積により地下地形の起伏が均され、現況のほぼ平坦な地表地形が形成されている。

七本桜軽石層・今市軽石層は、テフラ層の最上部、黒色土層の直下に見られる特徴的な軽石層である。七本桜軽石層は黄白色の軽石粒から、今市軽石層はやや発泡のよい赤褐色の軽石粒からなる。TP02では七本桜軽石層と今市軽石層がそれぞれ層として識別できるが、TP01・04～06では両者が混じり合って一つの層を成している。

上部ローム層は、明褐色から褐色を呈する。下半部はやや粘土化が進み、暗色がかっている。

鹿沼軽石層は、黄色の軽石粒からなる。純層である。粒径は約3mm、層厚は30cm前後である。

下部ローム層は、層厚１m前後で、やや暗色がかった褐色を呈する。上部ローム層に比べて粘土化が進んでおり、よく締まる。

礫層は、径５～ 40mmほどの円礫からなり、礫間には下部ロームが入り込んでいる。TP02・03でしか確認していないが、地下地形の基盤層を形成している段丘礫層と考えられる。

第３図　基本層序図　(S≒1:40)

第4図　土層観察用試掘坑の位置図

TP01
1　基調色土(10YR2/2)　表土層、畑耕作土。
2　黒色土(10YR1.7/1)　粘性中、やや締まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　黒色土とローム の漸移層、黄白色砕石粒φ1～5mm少量、赤褐色軽石粒φ1～5mm微量を含む。粘性中、締まる。七ヶ塚・今市軽石層に相当する。
4　明褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性小、締まる。
5　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、粘性中、締まる。4層よりやや暗い色調を呈する。
6　褐灰色土(7.5YR4/1)　7層と同じ鹿沼軽石層であるがやや黒ずむ。7層上面が表土化したもの と思われる。粘性小、よく締まる。
7　黄色土(2.5YR/6)　漸漸軽石層、純層、粒径3mm前後、粘性弱、よく締まる。
8　褐色土(7.5YR4/4)　ローム層、粘性強、よく締まる。

TP02
1　黒褐色土(10YR2/2)　表土層、畑耕作土。
2　黒色土(10YR1.7/1)　粘性中、やや締まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　黒色土とローム の漸移層、黄白色軽石粒φ1～5mmを少量含む。粘性中、締まる。七本桜軽石層に相当する。
4　明赤褐色土(5YR5/8)　ローム層、赤褐色軽石粒φ1～5mmを多量に含む。粘性強、締まる。今市軽石層に相当する。
5　暗褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性中、締まる。
6　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、円礫φ5～40mmを少量含む、粘性強、締まる。
7　礫　礫層、円礫φ5～40mm、礫間には6層のロームが堆積する。

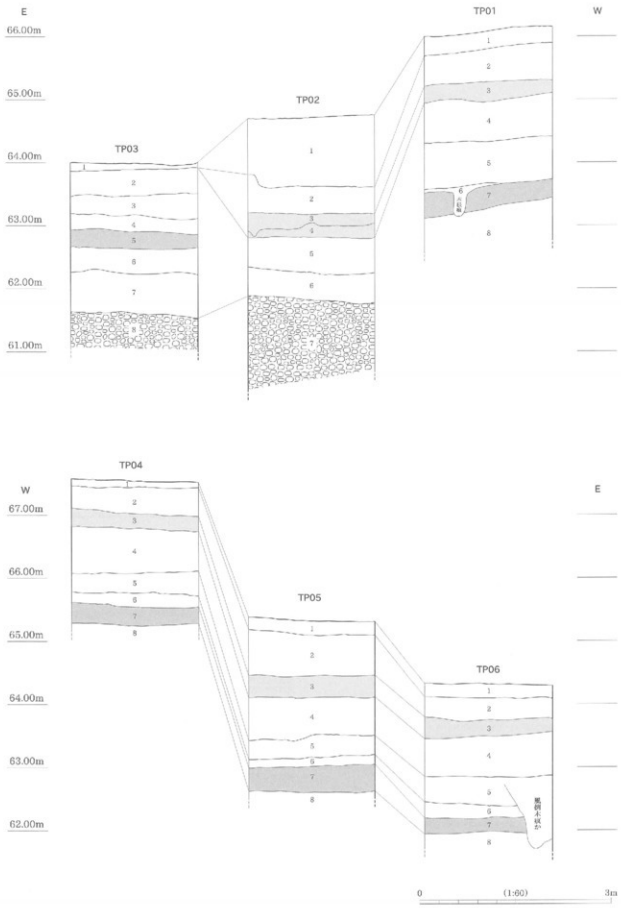
TP03
1　黒褐色土(10YR2/3)　表土層、畑耕作土。
2　暗褐色土(7.5YR3/6)　ローム層、粘性中、締まる。
3　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、粘性中、締まる。2層よりやや暗い色調を呈する。
4　褐色土(7.5YR4/6)　3層と同質のローム層、黄色軽石粒φ1～3mmを少量含む、粘性中、締まる。
5　黄色土(2.5YR/6)　鹿沼軽石層、純層、粒径3mm前後、粘性弱、よく締まる。
6　暗褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性中、締まる。
7　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、円礫φ5～40mmを少量含む、粘性強、締まる。
8　礫　礫層、円礫φ5～40mm、礫間には7層のロームが堆積する。

TP04
1　黒褐色土(10YR2/2)　表土層、畑耕作土。
2　黒色土(10YR1.7/1)　粘性中、やや締まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　黒色土とローム の漸移層、黄白色軽石粒φ1～5mm少量、赤褐色軽石粒φ1～5mm多量を含む、粘性中、締まる。七本桜・今市軽石層に相当する。
4　赤褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性中、締まる。
5　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、粘性中、締まる。5・6層は、4層よりやや明るい色調を呈する。
6　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、黄色軽石粒φ1～3mmを少量含む、粘性中、締まる。
7　黄色土(2.5YR/6)　漸漸軽石層、純層、粒径3mm前後、粘性弱、よく締まる。
8　褐色土(7.5YR4/4)　ローム層、粘性強、よく締まる。

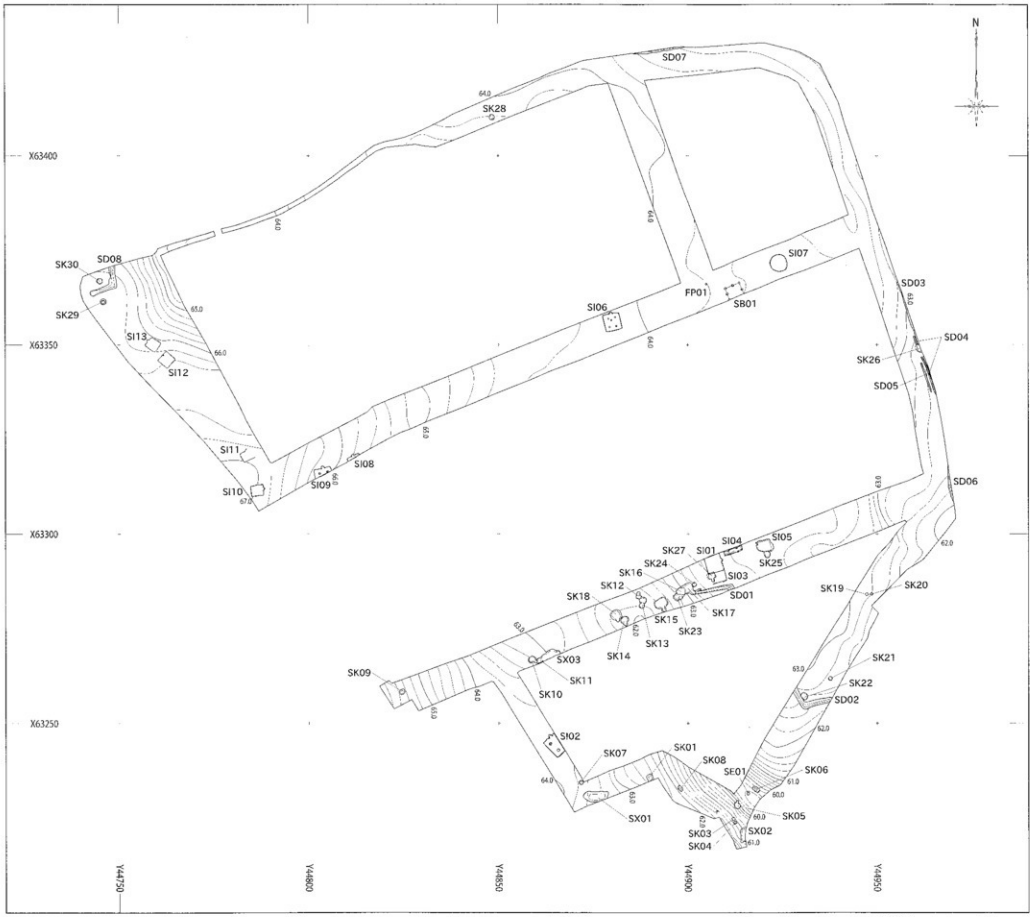
TP05
1　黒褐色土(10YR2/2)　表土層、畑耕作土。
2　黒色土(10YR1.7/1)　粘性中、やや締まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　黒色土とローム の漸移層、黄白色軽石粒φ1～5mm少量、赤褐色軽石粒φ1～5mm多量を含む、粘性中、締まる。七本桜・今市軽石層に相当する。
4　赤褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性中、締まる。
5　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、粘性中、締まる。5・6層は、4層よりやや明るい色調を呈する。
6　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、黄色軽石粒φ1～3mmを少量含む、粘性中、締まる。
7　黄色土(2.5YR/6)　漸漸軽石層、純層、粒径3mm前後、粘性弱、よく締まる。
8　褐色土(7.5YR4/4)　ローム層、粘性強、よく締まる。

TP06
1　黒褐色土(10YR2/2)　表土層、畑耕作土。
2　黒色土(10YR1.7/1)　粘性中、やや締まる。
3　黒色土(10YR2/2)　黒色土とローム の漸移層、黄白色軽石粒φ1～5mm少量、赤褐色軽石粒φ1～5mm少量を含む、粘性中、締まる。七本桜・今市軽石層に相当する。
4　赤褐色土(7.5YR5/6)　ローム層、粘性中、締まる。
5　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、粘性中、締まる。5・6層は、4層よりやや明るい色調を呈する。
6　褐色土(7.5YR4/6)　ローム層、黄色軽石粒φ1～3mmを少量含む、粘性中、締まる。
7　黄色土(2.5YR/6)　漸漸軽石層、純層、粒径3mm前後、粘性弱、よく締まる。
8　褐色土(7.5YR4/4)　ローム層、円礫φ20～30mmを少量含む、粘性強、よく締まる。

第5図　土層柱状図(1)


E
66.00m
65.00m
64.00m
63.00m
62.00m
61.00m
TP03
TP02
TP01
W
W
67.00m
66.00m
65.00m
64.00m
63.00m
62.00m
TP04
TP05
TP06
E
黒褐土状か
0
(1:60)
3m

第6図　土層柱状図(2)


N
X63400
X63350
X63300
X63250
Y44750
Y44800
Y44850
Y44900
Y44950
SD07
SK28
SK30
SD08
SK29
SI13
SI12
SI11
SI10
SI09
SI08
SI06
FP01
SB01
SI07
SD03
SD04
SK26
SD05
SD06
SK27
SI01
SI04
SI05
SK24
SK16
SI03
SK25
SK12
SK18
SD01
SK17
SK15
SK23
SK13
SK14
SX03
SK11
SK10
SK09
SK19
SK20
SK21
SK22
SD02
SI02
SK07
SK01
SK08
SE01
SK06
SX01
SK03
SK04
SX02
SK05
0
(1:1,000)
50m

第7図　遺跡全体図

3　遺構と遺物

本遺跡からは、断続的ながら縄文時代早期から近世に至るまでの遺構と遺物を検出した。以下、それぞれの時代ごとに報告する。

A　縄文時代

竪穴住居1軒、土坑1基、屋外炉1基を検出した。縄文時代の遺構と遺物は、調査区北東側に偏在する傾向が見られる。

1）竪穴住居

SI07（第8図、PL2・24）

調査区北側の G20 区に位置する。平面形は円形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長径 4.30m、短径 4.25m、壁高 0.10m である。竪穴の内外を精査したが柱穴は検出できなかった。

遺物は、深鉢（1～13）と石器（14～15）が出土している。遺物の大半は覆土中からの出土であるが、このうち 12 は床面直上から出土している。

1～13 は深鉢である。1・2は口縁部片で、口縁部は緩く外反する。1は口縁部文様帯に細沈線による鋸歯状文が施される。口唇部の断面は角頭状を呈する。2は太沈線が縦位から斜位に粗く施文される。3～11は胴部片である。3は太沈線が縦位から斜位に粗く施文される。4は太沈線が縦位と横位に施文される。5は太沈線が斜位に粗く施文される。6は太沈線が横位に施文される。7～9は細沈線と貝殻腹縁文が施文されるものである。10は太沈線間に刺突文が施される。内面には丁寧なミガキが施され、焼成は堅緻である。11は半裁竹管状工具による刺突文が施文される。12・13 は尖底である。先端は鋭角に尖る。細沈線が横位から斜位に施文される。14～ 16 は石器である。14・15 は石鏃である。いずれも未製品で、石材は珪質頁岩である。16 は敲石である。両側縁と下端の一部に敲打による剥離が見られる。石材はホルンフェルスである。ほかに剥片など 17 点が出土している。

出土遺物から、早期中葉の田戸下層式期の竪穴住居と考えられる。

2）土　　坑

SK28（第9図、PL2・24）

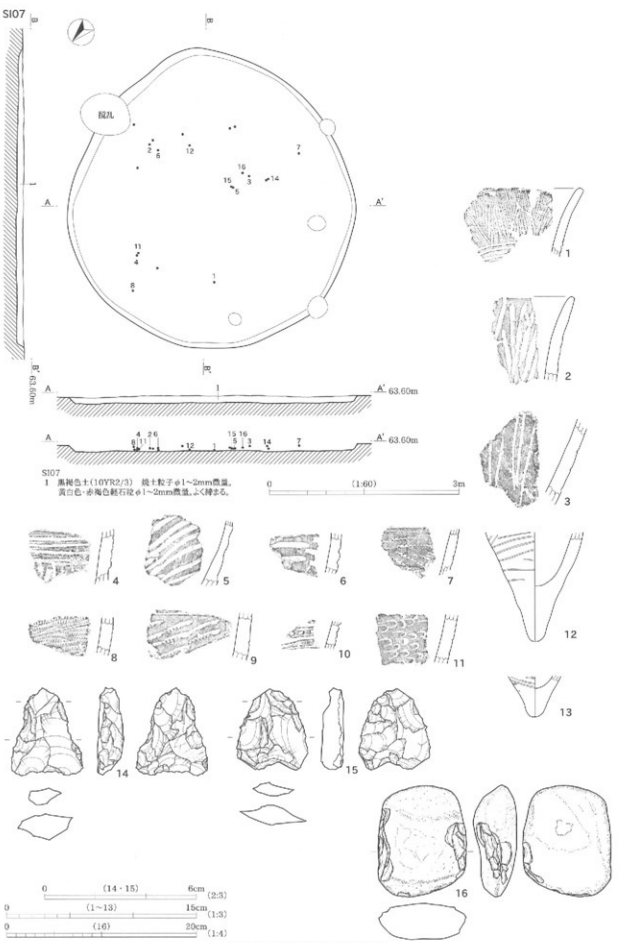
調査区北側の C12・D12 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状となる。規模は、長径 1.50m、短径 1.42m、深さ 0.30m である。

遺物は、覆土中から深鉢の胴部片が6点（1）出土している。1は外面に単節 LR の縄文が縦方向に施文される。

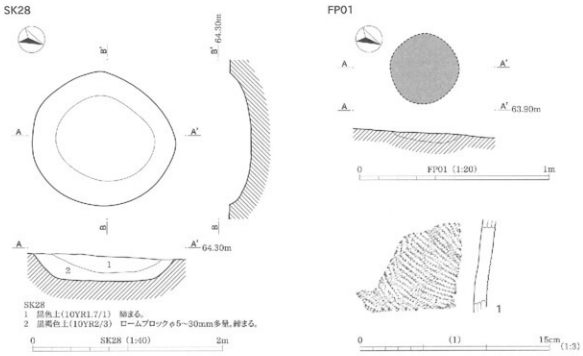
3）屋 外 炉

FP01（第9図、PL2）

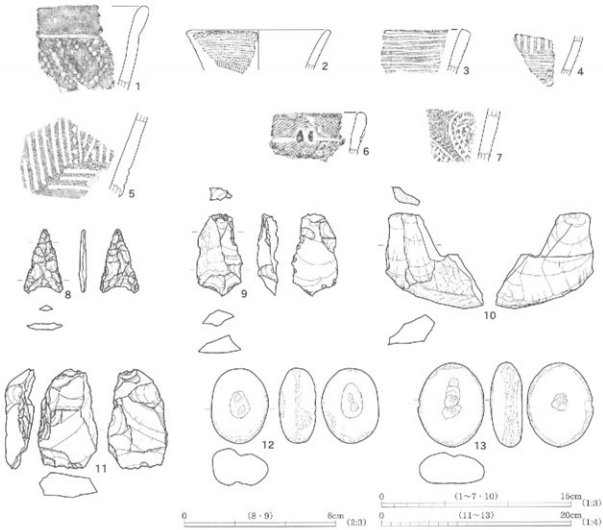
調査区北側の H18 区に位置する。平面形は円形である。規模は、長径 0.38m、短径 0.35m で、遺構の掘り込みはない。地山が被熱して円形に焼土化した箇所を検出したもので、遺構検出面から深さ 5cm くらいまで



第8図　SI07実測図・出土遺物



第9図　SK28・FP01実測図・出土遺物



第10図　遺構外出土遺物

表2　SI07出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	縄文土器	深鉢	[19.0]	-	-	口縁部文様帯は細沈線による鋸歯状文。	にぶい黄褐	長・石	口縁	覆土	
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文。	灰黄褐	長・石・雲	口縁	覆土	
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文。	明黄褐	長・石・雲	胴	覆土	
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文。	明黄褐	長・石・雲・礫	胴	覆土	
5	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文。	にぶい黄橙	長・石	胴	覆土	
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文。	灰黄褐	長・石・礫	胴	覆土	
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文、貝殻腹縁文。	にぶい黄橙	長・石	胴	覆土	
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文、貝殻腹縁文。	にぶい褐	長・石・雲	胴	覆土	
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文、貝殻腹縁文。	灰黄褐	長・石・骨・礫	胴	覆土	
10	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文、刺突文。	にぶい褐	長・石	胴	覆土	
11	縄文土器	深鉢	-	-	-	半截竹管状工具による刺突文。	にぶい黄褐	長・石・礫	胴	覆土	
12	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文。	橙	長・石・雲	尖底	床面	
13	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文。	にぶい黄褐	長・石・雲	尖底	覆土	

番号	種別	器種	計測値（cm、g）				成形等の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
14	石器	石鏃	3.5	2.9	1.0	9.1	未成品。	珪質頁岩	覆土	
15	石器	石鏃	3.2	2.8	0.9	7.9	未成品。	珪質頁岩	覆土	
16	石器	敲石	11.8	9.3	4.6	691.0		ホルンフェルス	覆土	

表3　SK28出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	単節LR縄文。	灰黄褐	長・石・雲	胴	覆土	

表4　遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			調整・文様等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置	備考
			口径	器高	底径						
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁部無文帯、横位沈線文、羽状縄文。	にぶい黄褐	長・石	口縁	覆土	SK15
2	縄文土器	深鉢	[10.8]	-	-	細沈線文、刺突文。	にぶい黄橙	長・石	口縁	覆土	SI03
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	細沈線文。	にぶい黄橙	長・石・赤	口縁	表採	
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	細・太沈線文。	にぶい黄橙	長・石	胴	覆土	SI06
5	縄文土器	深鉢	-	-	-	太沈線文、刺突文。	にぶい黄褐	長・石	胴	表採	G20区
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文、横位沈線文、貼付文。	灰黄褐	長・石・雲	口縁	覆土	SI06
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	縄文、曲線状の沈線文、刺突文。	にぶい黄橙	長・石・雲	胴	覆土	SI13

番号	種別	器種	計測値（cm、g）				成形等の特徴	石材	出土位置	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
8	石器	石鏃	2.6	0.3	2.0	0.9	凹基式。	珪質頁岩	表採	
9	石器	剥片	3.4	1.8	0.9	4.7		珪質頁岩	表採	
10	石器	剥片	7.6	7.6	4.5	152.7		メノウ	表採	試掘6T
11	石器	打製石斧	10.6	6.3	3.1	225.9	未製品。	ホルンフェルス	表採	D12区
12	石器	凹石	8.9	7.0	3.3	268.1		砂岩	表採	
13	石器	凹石	7.9	6.0	3.9	219.1		砂岩	表採	試掘13T

被熱による地山の焼土化が確認できる。

出土遺物がなく帰属時期は不明であるが、縄文時代の遺構と遺物が集中する調査区北東側に位置していることから縄文時代の屋外炉である可能性が考えられる。

４）遺構外出土遺物 （第10図、PL24）

遺構外から出土した縄文時代の遺物は多くはないが、早期から前期にかけての遺物が出土している。

１～８は深鉢である。１は撚糸文系土器の口縁部片である。平縁となるもので、口縁部文様帯は無文とし、横位沈線で区画したのち胴部は縦位羽状に節の荒い縄文を施文する。縄文の圧痕は浅い。早期前葉の花輪台式と思われる。２～５は沈線文系土器である。２・３は口縁部片である。口縁部は緩く外反し、口唇部の断面は角頭状を呈する。２は口唇部直下に斜位の短い細沈線、その下を複数条からなる横位の細沈線で区画し、沈線間に梯子状となる短い細沈線が施された斜位の細沈線文が施される。３は口縁部に横位の細沈線文が施される。４・５は胴部片である。４は縦位に太沈線、横位に細沈線が施される。５は縦位と横位にそれぞれ平行する太

沈線文が施され、沈線間の一部には刺突文が施される。いずれも早期中葉の田戸下層式と思われる。6は口縁部片である。口縁部はやや肥厚し、口唇部の断面は丸頭状を呈する。地文に単節縄文を施し、口縁部には沈線が1条巡っている。沈線上には2個一組となる小豆状の貼付文が加飾される。7は胴部片である。地文に単節縄文を施し、平行する沈線によって曲線的な文様を描出したのち沈線間に刺突を施す。6・7は文様要素や胎土から前期後半に比定される。8～13は石器である。8は凹基式の石鏃である。石材は珪質頁岩である。9は二次加工痕と微細剥離痕を有する剥片である。石材は珪質頁岩である。10はメノウ製の剥片である。石器背面側（正面側）に縦長剥片を連続的に剥離した痕跡を残している。11は打製石斧の未製品と思われる。石材はホルンフェルスである。12・13は凹石である。石材はいずれも砂岩で、表・裏面に凹みがある。また、側縁部には浅い敲打痕が見られるが、あまり強い加撃は行われていないようである。

B　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居12軒、掘立柱建物1棟を検出した。

1）竪穴住居

SI01（第11・12図、PL3・25）

調査区南側のO18区に位置し、北側はさらに調査区外へ延びる。SI03を切り、SK27に切られる。平面形は横長の長方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸4.60m以上、短軸4.10m、壁高0.10mで、主軸方位はN－74°－Eを示す。カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。焚口部の両側には、袖石として凝灰岩の切石ブロックが直立して一部遺存している。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は検出していない。

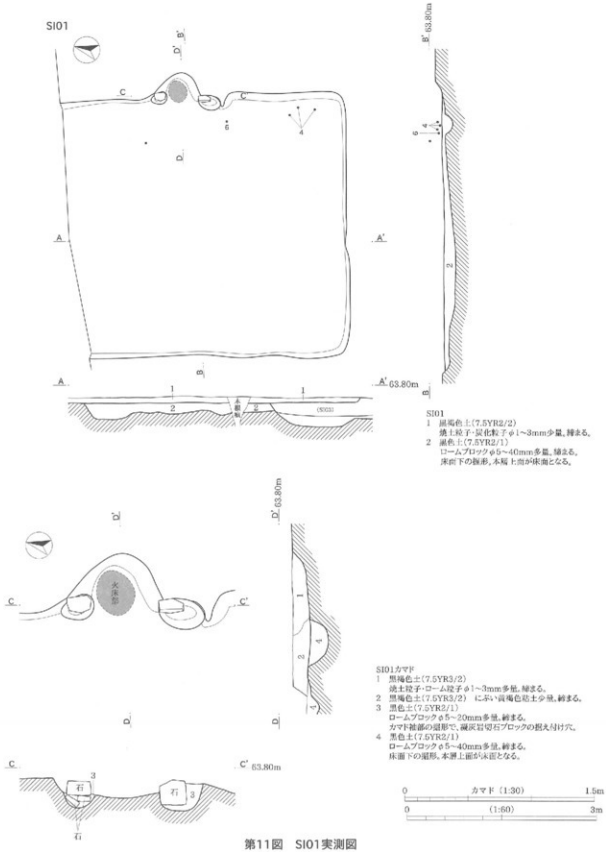
遺物は、土師器甕（1～4）・小形甕（5・6）、黒色土器塊（7～10）、須恵器坏（11）・盤（12）のほか、土師器片116点、黒色土器片13点、須恵器片7点が出土している。このうち3はカマド内から、4・6はカマド右側の床面上から、ほかは覆土中からの出土である。1～4は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。4は、東側に隣接するSI04から出土した破片と一部接合が確認されたが、床面上からまとまって出土していることから本遺構に伴う遺物と判断した。5・6は小形甕で、5は器壁の厚いものである。7～10は黒色土器の塊で、内面に黒色処理が施される。このうち8の外面体部には墨痕が一部確認できる。11は須恵器の坏で、体部は直線的に開いて立ち上がる。12は盤である。13は用途不明の鉄製品で、板状を呈する。

SI02（第13・14図、PL4・25・26）

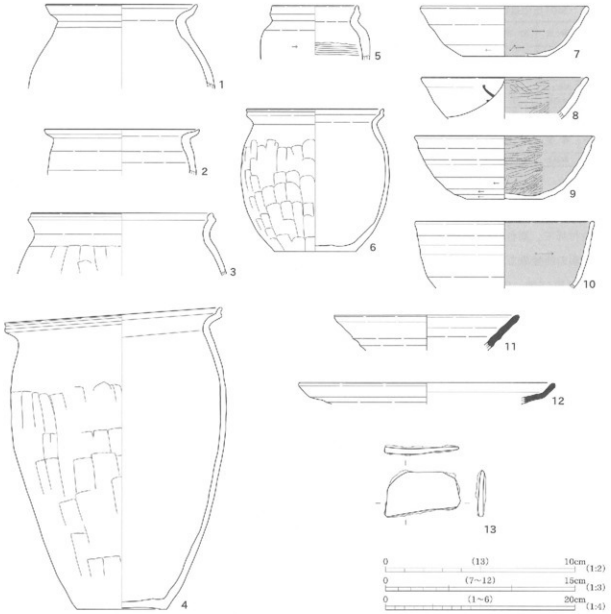
調査区南側のT14区に位置し、北東側はさらに調査区外へ延びる。平面形はやや縦長の方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸5.25m、短軸3.70m以上、壁高0.30mで、主軸方位はN－44°－Wを示す。カマドは北西壁のほぼ中央に付設されている。黒色土と焼土粒子が混じるにぶい黄褐色粘土で構築された袖部が一部遺存する。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には掘形を有する。中央部を残して周囲を四角く掘り下げ、さらにいくつか不整形な穴が掘り込まれている。主柱穴はP1・P2の2基を検出した。規模は、直径0.70～0.75m、深さ0.78～0.83mである。ほかに床面下からP3～P7の5基のピットを検出した。その性格については不明であるが、カマドの両脇に位置するP3・P4・P7については、カマドに伴う棚状施設のようなものであった可能性も考えられる。

遺物は、土師器甕（1・2）・仏鉢（3）、須恵器蓋（4・5）・高台付坏（6）・盤（7）・瓶（8）・横瓶（9）・

甕（10）、石製紡錘車（11）のほか、土師器片 124 点、黒色土器片 13 点、須恵器片 34 点が出土している。このうち 1・6 はカマド内、9・10 は床面下の掘形、ほかは覆土中からの出土である。1・2 は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。1 は胴部下半に縦位ヘラミガキが施されており、常総型と思われる。3 は仏鉢である。口縁部は内湾し、端部は角頭状にお



第11図　SI01実測図



第12図　SI01出土遺物

表5　SI01出土遺物観察表（1）

番号	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
1	土師器	甕	[16.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	橙	長・石	口縁～胴	堆土
2	土師器	壺	[16.2]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ロクロナデ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ロクロナデ。	灰褐	長・石・雲	口縁～胴	堆土
3	土師器	甕	[19.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	にぶい橙	長・石	口縁～胴	ｶｸﾄﾞ
4	土師器	甕	22.8	31.9	9.4	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。底部：ナデ。	浅黄橙	長・石・雲	口縁～底	床面・SI04覆土
5	土師器	小形鉢	[9.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：横位斜位ハケメ。器壁は厚い。	橙	長・石・雲	口縁～胴	堆土
6	土師器	小形壺	14.4	15.0	8.6	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。底部：ヘラケズリ。	にぶい橙	長・石・礫	口縁～底	床面
7	黒色土器	椀	13.0	4.0	[6.5]	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい黄橙	長・石・雲	口縁～底	堆土
8	黒色土器	椀	[13.0]	-	-	外面：ロクロナデ、内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい橙	長・石	口縁	堆土

表6　SI01出土遺物観察表（2）

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
9	黒色土器	椀	14.0	5.0	[6.0]	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。内面：黒色処理、横位ミガキ、底部：回転ヘラケズリ。	にぶい黄橙	長・白・雲・褐	口縁～底	覆土
10	黒色土器	鉢	[14.0]	-	-	外面：ロクロナデ、内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい黄橙	長・石・雲	口縁～体	覆土
11	須恵器	坏	[14.6]	-	-	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ。	灰	長・石・骨	口縁	掘形
12	須恵器	甕	[19.8]	-	-	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ。	灰	長・石・珪	口縁	覆土

番号	種別	器種	計測値（cm、g）				成形等の特徴	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量		
13	鉄製品	用途不明	(4.0)	(2.4)	(0.5)	(7.0)	板状を呈する。	覆土

さめる。内外面に横位ヘラミガキが施される。4・5は須恵器の蓋で、このうち5はやや大振りである。6は高台付坏で、高台内には「×」字状のヘラ記号がある。7は甕、8は瓶、9は横瓶、10は甕である。11は粘板岩製の紡錘車である。上・下面ともに表面が剥落している。

SI03（第15図、PL5・26）

調査区南側のP18区に位置する。北側をSI01、西側をSK27に切られる。平面形は横長の長方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸4.20m、短軸3.85m、壁高0.25mで、主軸方位はN－20°－Wを示す。カマドは北壁の中央やや西寄りに付設されている。黒色土と焼土粒子が混じったにぶい黄色粘土で構築された袖部が一部遺存する。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は検出していない。

遺物は、土師器甕（1）、黒色土器塊（2）のほか、土師器片45点、黒色土器片4点、須恵器片1点が出土している。このうち1は床面下の掘形、ほかは覆土中からの出土である。1は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。2は黒色土器の塊で、内面に黒色処理が施される。底部は右回転ヘラ切り無調整である。外面底部に「因」（異体字）の墨書がある。

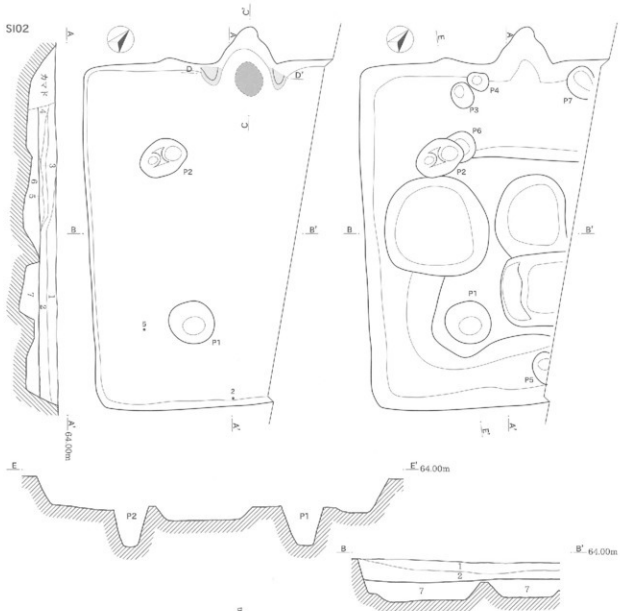
SI04（第16図、PL5・6・26）

調査区南側のO19区に位置し、北側はさらに調査区外へ延びる。竪穴の大半が調査区外にあるため不明な点が多い。平面形は方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸4.75m、短軸1.05m以上、壁高0.30mで、南辺を基準とした方位はN－71°－Eを示す。カマドは検出していない。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は6基検出した。主柱穴と思われるP1・P2の2基と、南辺の壁上にある一回り規模の小さいP3・P4・P5・P6の4基である。前者の規模は、直径0.65～0.68m、深さ0.45～0.63m、後者の規模は、直径0.35～0.38m、深さ0.40～0.87mである。これらの柱穴については、一連の上屋構造であるのか、建て替えなどによる新旧関係があるのかについては現状では判断できない。

遺物は、土師器甕（1・2）、黒色土器塊（3～5）、須恵器坏（6～9）・高台付坏（10・11）のほか、土師器片342点、黒色土器片41点、須恵器片19点が出土している。いずれも覆土中からの出土である。1・2は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。3～5は黒色土器の塊で、内面に黒色処理が施される。5は外面体部に判読不明の墨書がある。6～9は須恵器の坏である。底部は6・7・9が右回転ヘラ切り無調整、8が右回転ヘラ切り後ナデである。また、7～9は外面底部にヘラ記号がある。10・11は高台付坏である。

SI05（第17図、PL5・6）

調査区南側のO19・O20区に位置する。南側をSK25に切られる。平面形は不整長方形を呈する。床面ま

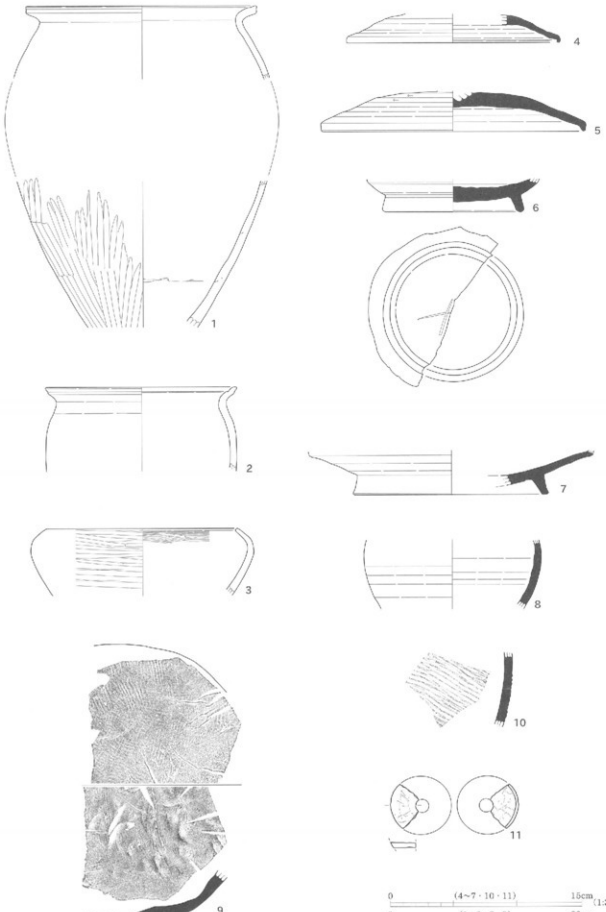


SI02
1 黒褐色土(7.5YR2/2)　締まる。
2 黒褐色土(7.5YR2/2)　にぶい黄橙色粘土ブロックφ10~20mm少量。
粘土粒子・ローム粒子φ1~3mm少量。締まる。
3 黒褐色土(7.5YR3/2)　にぶい黄橙色粘土ブロックφ10~15mm多量。
黒褐色ブロックφ10~30mm少量。焼土粒子φ1~3mm少量。締まる。
4 褐灰褐色土(7.5YR2/3)　にぶい黄褐色粘土ブロック5~35mm大量。締まる。
5 褐灰褐色土(7.5YR2/3)　ロームブロックφ5~30mm大量。締まる
6 暗褐灰色土(7.5YR3/3)　焼土ブロックφ5~15mm多量。
にぶい黄褐色粘土ブロックφ5~20mm多量。黒褐色ブロックφ5~20mm多量。
締まる。床面下の掘形。本層上面が床面となる。
7 暗褐色土(7.5YR3/3)　ロームブロックφ5~30mm多量。
黒褐色ブロックφ5~20mm多量。焼土粒子φ1~3mm多量。
締まる。床面下の掘形。本層上面が床面となる。

SI02カマド
1 黒色土(7.5YR2/1)　ローム粒子φ1~3mm少量。締まる。
2 黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子φ1~3mm多量。締まる。
3 黒褐色土(7.5YR3/2)　にぶい黄色粘土ブロックφ5~15mm多量。
焼土粒子・炭化粒子φ1~3mm少量。締まる。
4 黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子φ1~3mm少量。締まる。
5 黒褐色土(7.5YR3/2)　焼土粒子φ1~3mm多量。炭少量。やや締まる。
6 にぶい黄橙色粘土(10YR7/3)
黒色土と焼土粒子が少量混じる。締まる。カマド袖部。
7 暗褐色土(7.5YR3/3)
焼土ブロックφ5~30mm多量。木炭上面がカマド火床部。
8 暗褐色土(7.5YR3/3)　ロームブロックφ5~20mm多量。
黒褐色土ブロックφ5~10mm多量。
灰色砂質土(10Y7/1)ブロックφ10~30mm少量。
焼土粒子φ1~3mm少量。
床面下の掘形。本層上面が床面となる。

0　カマド(1:30)　1.5m
0　(1:60)　3m

第13図　SI02実測図



第14図　SI02出土遺物

表7　SI02出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm） 口径	計測値（cm） 器高	計測値（cm） 底径	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土状況
1	土師器	甕	24.0	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。有稜甕。	にぶい赤褐	長・石・礫	口縁～胴	掘土・ｶｸﾗﾝ
2	土師器	甕	[20.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	にぶい黄橙	長・石・雲・礫	口縁～胴	覆土
3	土師器	仏 鉢	[20.0]	-	-	外面：横位ミガキ、内面：横位ミガキ。	橙赤褐	長・石・骨	口縁～体	覆土・掘部
4	須恵器	甕	[16.8]	-	-	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	灰	長・石・礫・黒	口縁～体	覆土
5	須恵器	甕	20.4	-	-	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	灰	長・石・黒	口縁～体	覆土
6	須恵器	高台付坏	-	-	10.6	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ、底部：高台内ナデ。 「×」字状のヘラ記号あり。	灰白	長・石・骨・礫	底	ｶｸﾗﾝ
7	須恵器	盤	-	-	[14.6]	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ。	灰	長・石・礫・黒	体～底	覆土
8	須恵器	蓋	-	-	-	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ。	灰	長・石・黒	鈕	覆土
9	須恵器	壺 瓶	-	-	-	外面：平行タタキ、内面：無文あて具、ナデ。	灰	長・石・雲・竹・	胴	掘部
10	須恵器	壺	-	-	-	外面：平行タタキ、内面：ナデ。	灰	長・石・骨・礫	胴	掘部

番号	種別	器種	計測値（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重量	成形等の特徴	石材	出土位置
11	石製品	紡錘車	[4.8]	[4.8]	(0.5)	-	上・下面ともに表面が剥離している。	粘板岩	覆土

で削平を受け、掘形だけが遺存しているものと思われる。規模は、長軸4.30m以上、短軸3.15m以上で、長軸を基準とした方位はN－76°－Eを示す。北壁の中央付近に焼土粒子の混入がわずかに見られることからカマドが付設されていた可能性がある。柱穴は検出していない。

図示した遺物はないが、掘形の埋土と思われる中から土師器片7点、須恵器片4点が出土している。

SI06（第18・19図、PL.7・26・27）

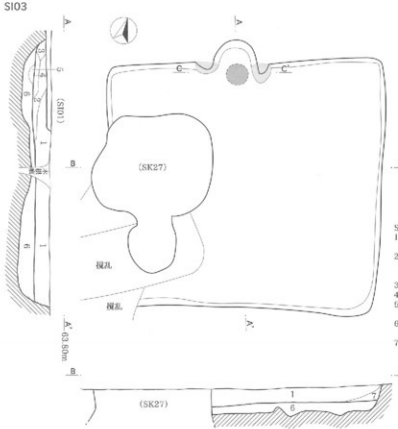
調査区北側のI15・I16区に位置する。平面形は方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸4.40m、短軸4.20m、壁高0.30mで、主軸方位はN－15°－Wをポす。カマドは北壁の中央に付設されている。袖部はにぶい黄色粘土で構築している。床面は平坦で、カマド手前から中央にかけてやや硬化している。床面下には掘形を有する。中央部とカマド部分、カマドの反対側を残して、両側をそれぞれ平面「コ」の字状に掘り下げ、さらに中央付近には円形状の穴が掘り込まれている。柱穴は、主柱穴と考えられる方形配列の4基を検出した。規模は、直径0.68～0.76m、深さ0.50～0.60mである。

遺物は、土師器甕（1～3）、黒色土器塊（4・5）、須恵器蓋（6）・坏（7～9）・高台付坏（10・11）・盤（12）・壺（13）、刀子（14・15）、用途不明鉄製品（16・17）のほか、土師器片68点、黒色土器片8点、須恵器片11点が出土している。このうち7・8が床面下の掘形から、ほかは覆土中からの出土である。1～3は土師器の甕である。1は口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反し、口縁端部は短くつまみ上げられる。2・3は口縁端部を丸くおさめる。4・5は黒色土器の塊で、内面に黒色処理が施される。6は須恵器の蓋で、やや火振りである。7～9は坏である。9の底部は右回転ヘラ切り後ナデである。10・11は高台付坏である。11の高台内には、朱墨で「真岡」（「岡」は異体字）と墨書されている。器面に遺存する朱墨について蛍光X線分析を行った結果、ベンガラを使ったものであることが判明している[1]。12は盤で、高台内にはヘラ記号がある。13は壺の口縁部片である。14・15は平棟造りの刀子である。14は両関式で、両端が僅かに欠損するものの、ほぼ完形品である。茎の断面は楔形を呈し、茎端部に錆化した柄木が僅かに見られる。15は刀身部の大部分が欠損し、茎と木製柄の一部が残存する。楔形を呈する茎は柄木の中に遺存する。16・17は用途不明の鉄製品である。

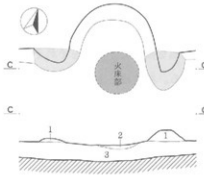
---

1) 赤色部（朱墨）及びその周辺の2箇所について、蛍光X線分析法を用いて組成分析を行った。定性分析で特定された元素は主に鉄で、定量分析の解析では鉄が70wt%前後という結果であった。このことから、朱墨は水銀でないことが確認された。すなわち、墨の原料は鉄系の朱であると言える。

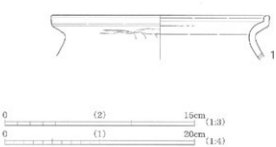
SI03

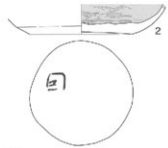


SI03
1 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロックφ5~10mm少量。
焼土粒子φ1~3mm微量。締まる。
2 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム上多量。
にぶい橙色焼土少量、炭φ15~25mm少量。
焼土粒子φ1~3mm少量。締まる。
3 黒褐色土(7.5YR2/2) 焼土粒子φ1~3mm少量。締まる。
4 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒子φ2~3mm多量。締まる。
5 黒色土(7.5YR2/1) 焼土ブロックφ5~10mm多量。
締まる。本覆土面がカマド火床部。
6 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロックφ10~50mm多量。
締まる。床面下の掘形、本覆土面が床面となる。
7 褐色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ10~30mm少量。
締まる。底面にのみ堆積がみられる。



SI03カマド
1 にぶい黄色粘土(2.5Y6/3)
黒色土と焼土粒子が少量混じる。締まる。カマド袖部。
遺構面の内側は焼失して赤色化する。
2 黒色土(7.5YR2/1) 焼土ブロックφ5~10mm多量。
締まる。本覆土面がカマド火床部。
3 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロックφ10~50mm多量。
締まる。床面下の掘形、本覆土面が床面となる。



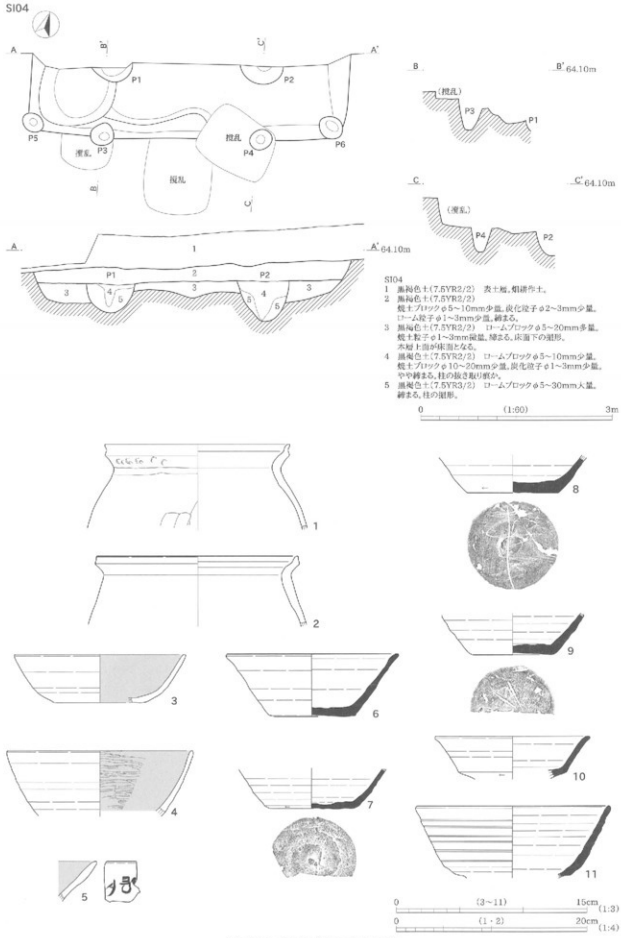


0 カマド(1:30) 1.5m
0 (1:60) 3m
0 (2) 15cm (1:3)
0 (1) 20cm (1:4)

第15図 SI03実測図・出土遺物

表8 SI03出土遺物観察表

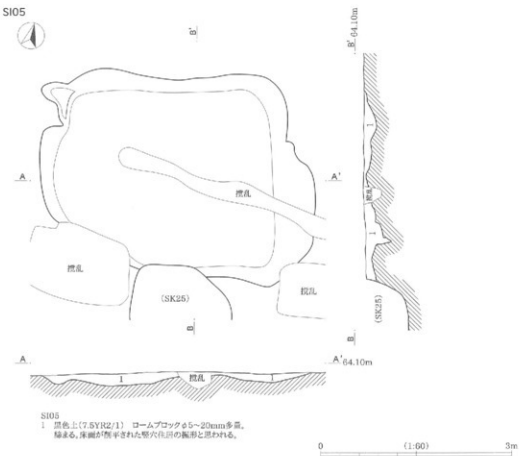
番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
1	土師器	甕	23.0	-	-	外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラケズリ。 内面:口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	橙	長・石・雲・礫多	口縁	覆土
2	黒色土器	椀	-	-	8.2	外面:ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。 内面:黒色処理、ミガキ。底部:右回転ヘラ切り。 「灰」(墨書字)の墨書あり。	にぶい橙褐	長・石・雲	口縁~底	覆土



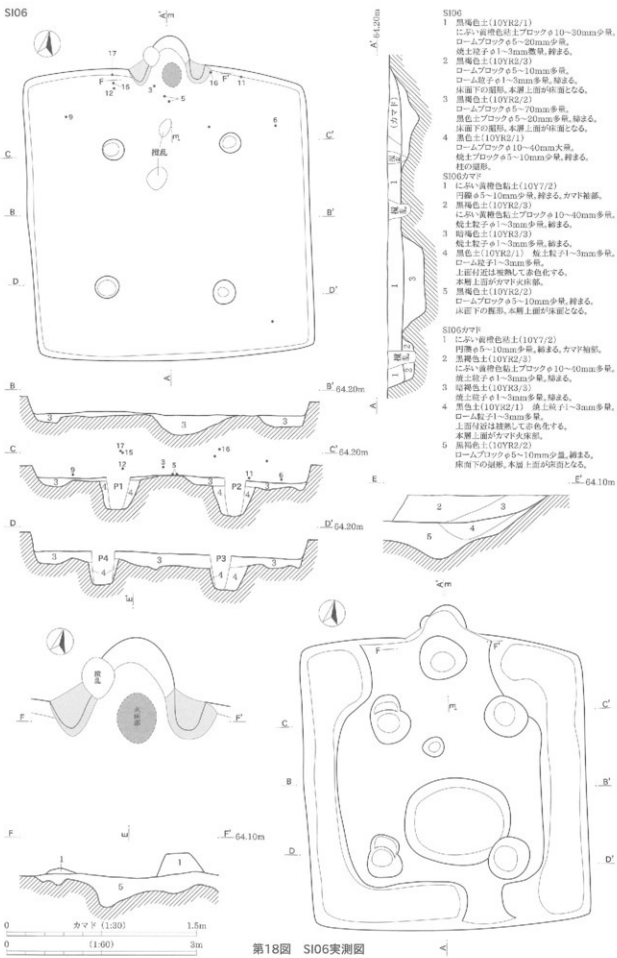
第16図　SI04実測図・出土遺物

表9　SI04出土遺物観察表

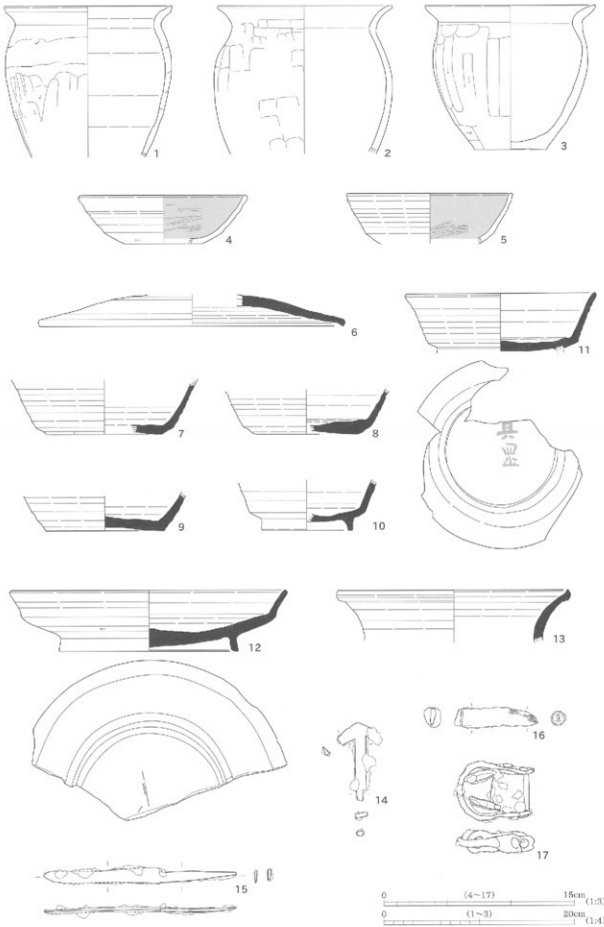
番号	種　別	器　種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色　調	胎　土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	[19.2]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、頸部絞り痕ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ。	橙	長・石	口縁～胴	覆土
2	土師器	甕	[21.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。	橙	長・石・礫	口縁～胴	覆土
3	黒色土器	坏	[13.4]	3.8	[6.6]	外面：ロクロナデ。内面：黒色処理、ミガキ。	にぶい褐	長・石・礫	口縁～底	覆土
4	黒色土器	坏	[14.4]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：黒色処理、放射ミガキ。	にぶい橙	長・石・骨	口縁～体	覆土
5	黒色土器	坏	-	-	-	外面：ロクロナデ。体部に判読不明の墨書あり。 内面：黒色処理、ミガキ。	にぶい黄橙	長・石・雲・礫	口縁～体	覆土
6	須恵器	坏	13.4	4.95	6.6	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 底部：右回転ヘラ切り。	灰	長・石・骨・礫多	口縁～底	覆土
7	須恵器	坏	-	-	6.8	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。底部：右回転ヘラ切り。 ヘラ記号あり。	灰	長・石・骨・礫	体～底	覆土
8	須恵器	坏	-	-	7.2	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ切り後ナデ。 ヘラ記号あり。	淡黄	長・石・骨	体～底	覆土
9	須恵器	坏	-	-	6.4	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 底部：回転ヘラ切り。ヘラ記号あり。	灰	長・石・骨・礫多	体～底	覆土
10	須恵器	高台付坏	[12.2]	-	-	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。	灰	長・石・礫	口縁～体	覆土
11	須恵器	高台付坏	[15.0]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	黄灰	長・石・骨・礫多	口縁～体	覆土



第17図　SI05実測図



第18図　SI06実測図



第19図　SI06出土遺物

表10　SI06出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径	成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
1	土師器	甕	17.4	-		外面：口縁部ヨコナデ、頸部上半はナデ。体部内面はヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	赤褐	長・石・雲	口縁～胴	覆土
2	土師器	鉢	18.2	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、頸部縦位ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	明黄褐	長・石・雲・礫	口縁～胴	覆土
3	土師器	鉢	17.8	15.3	7.4	外面：口縁部ヨコナデ、頸部縦位ヘラケズリ。下端横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。底部：ナデ。	赤褐	長・石・雲	口縁～底	覆土・掘形
4	黒色土器	椀	[12.7]	3.85	[6.0]	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい黄褐	長・石・雲	口縁～底	覆土
5	黒色土器	椀	[13.0]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい黄橙	長・石・骨	口縁～体	覆土
6	須恵器	蓋	[23.8]	-	-	外面：天井部回転ヘラケズリ。体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	灰	長・石・礫	口縁～体	覆土
7	須恵器	坏	-	-	9.0	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 底部：周縁部回転ヘラケズリ。	灰	長・石・骨	体～底	掘形
8	須恵器	坏	-	-	[8.0]	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	灰白	長・石・骨	体～底	掘形
9	須恵器	坏	-	-	9.2	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 底部：右回転ヘラ切り後ナデ。	灰	長・石・竹・礫	底	覆土
10	須恵器	高台付坏	-	-	7.2	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。底部：同転ヘラ切り。	灰白	長・石・礫	体～底	覆土
11	須恵器	高台付坏	14.8	-	10.0	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。底部：右回転ヘラ切り後ナデ。「凩判」（「判」は異体字、朱墨）の墨書あり	灰	長・石・骨・礫	口縁～底	覆土
12	須恵器	壺	21.4	4.8	14.0	外面：ロクロナデ。体部下端回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。底部：右回転ヘラ切り後ナデ。	灰白	長・石・骨・礫	口縁～底	覆土
13	須恵器	甕	[23.9]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	灰	長・石・骨	口縁	覆土・掘形

番号	種別	器種	計測値（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重量	成形等の特徴	出土位置
14	鉄製品	刀子	(15.1)	1.0	0.1	(19.8)		覆土
15	鉄製品	刀子	(8.5)	1.4	0.4	(14.8)		覆土
16	鉄製品	用途不明	(6.2)	(3.5)	3.7	(12.3)		覆土
17	鉄製品	用途不明	6.4	5.3	2.6	71.8		覆土

SI08（第20図、PL.8・27）

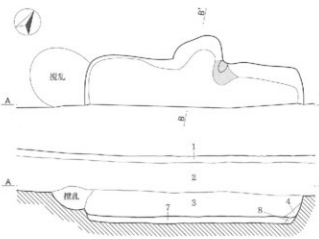
調査区北側のL9・M9区に位置し、南東側はさらに調査区外へ延びる。竪穴の大半が調査区外にあるため不明な点が多い。平面形は方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸3.30m、短軸0.70m以上、壁高0.40mで、主軸方位はN－27°－Wを示す。カマドは北西壁の中央に付設されている。袖部はにぶい黄褐色粘土で構築している。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は検出していない。

遺物は、土師器甕（1）・小形甕（2）、黒色土器高台付塊（3・4）、須恵器蓋（5）・坏（6）・甕（7）のほか、土師器片38点、黒色土器片2点、須恵器片3点が出土している。すべて覆土中からの出土である。1は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。1は外面胴部に多文字墨書と人面が描かれている。墨痕が薄いため判然としないが、人面が描かれている左側に「□□□鳥［　］」の文字が見える。2は小形甕である。3・4は黒色土器の高台付塊で、内面に黒色処理が施される。5は須恵器の蓋で、やや大振りである。6は坏で、底部は回転ヘラ切り無調整である。外面底部に「□女」の墨書がある。7は甕の胴部片で、外面は平行タタキ、内面はナデが施される。

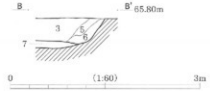
SI09（第21図、PL.8）

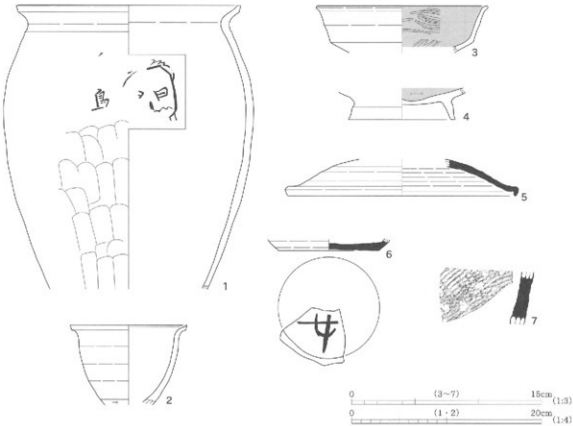
調査区北側のM8区に位置し、南側はさらに調査区外へ延びる。竪穴の大半が調査区外にあるため不明な点が多い。平面形は方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸4.55m、短軸2.30m以上、壁高0.06mで、主軸方位はN－8°－Wを示す。カマドは北壁の中央に付設されている。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は、主柱穴と考えられる2基を検出した。規模は、

SI08



SI08
1 黒褐色土(10YR2/2)　炭土混、締緩作土。
2 黒色土(10YR1.7/1)　やや締まる。
3 黒色土(10YR2/1)　ローム粒子φ1～3mm多量。
　ロームブロックφ5～20mm少量、締まる。
4 黒色土(10YR2/1)　ロームブロックφ10～30mm多量、締まる。
5 にぶい黄褐色砂土(10YR4/3)　締まる。
6 黒褐色土(10YR3/2)　焼土ブロックφ5～10mm少量。
　にぶい黄褐色粘土ブロックφ5～15mm少量。
　ロームブロックφ50～100mm多量、締まる。
7 黒色土(10YR2/1)　ロームブロックφ10～40mm多量、よく締まる。
　床面下の掘形、木根上面が床面となる。
8 黒色土(10YR2/1)　ロームブロックφ20～40mm大量、よく締まる。
　床面下の掘形、木根上面が床面となる。



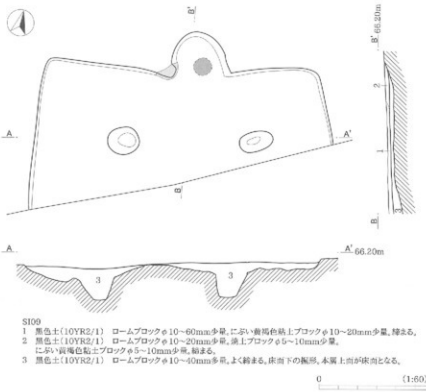


第20図　SI08実測図・出土遺物

表11　SI08出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	[23.6]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半はナデ、下半は縦位ヘラケズリ。「□□□鳥｛　｝」の文字と人面の墨書あり。内面：ナデ。	橙	長・石・礫・雲	口縁～胴	覆土・ｶﾏﾄﾞ
2	土師器	小形甕	[12.2]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上位はロクロナデ、下位はヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	橙	長・石	口縁～胴	覆土
3	黒色土器	坏	[13.4]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい橙	長・石・骨	口縁～体	覆土
4	黒色土器	高台付坏	-	-	8.4	外面：ロクロナデ。内面：黒色処理、ミガキ。	明黄褐	長・石・骨・礫	底	覆土
5	須恵器	壺	18.0	-	-	外面：天井部回転ヘラケズリ。体部ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	黄灰	長・石・骨多・礫	口縁～体	覆土
6	須恵器	坏	-	-	[8.0]	底部：回転ヘラ切り。「□女」の墨書あり。	灰黄	長・石	底	覆土
7	須恵器	壺	-	-	-	外面：平行タタキ、内面：ナデ。	灰	長・石・骨	胴	覆土

SI09



第21図　SI09実測図

直径0.50 ～ 0.53m、深さ0.50 ～ 0.54mである。

遺物は出土していない。

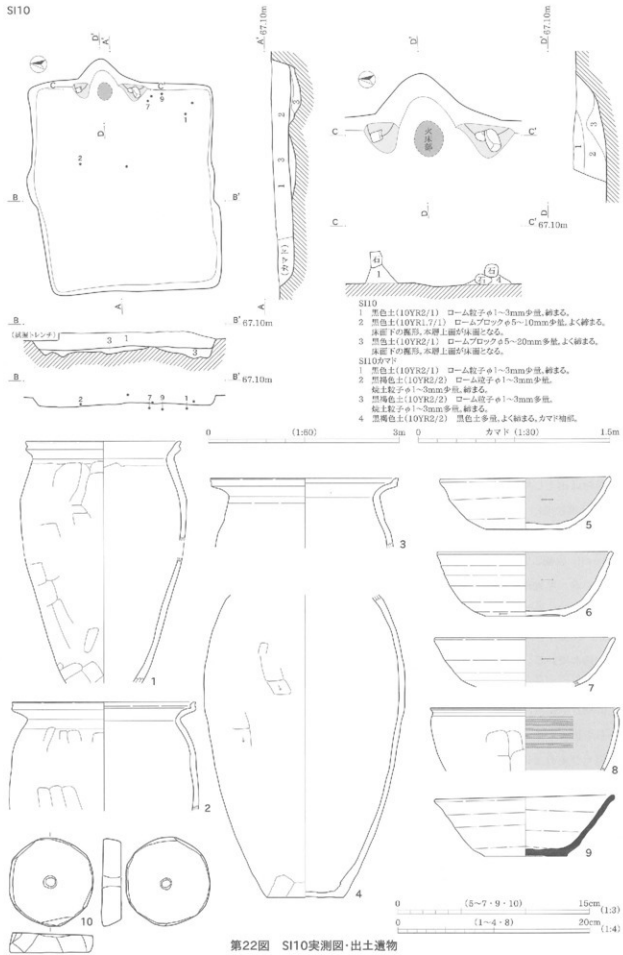
SI10（第22図、PL9・27・28）

調査区北側のM6区に位置する。平面形は縦長の長方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸3.15m、短軸2.70m、壁高0.30mで、主軸方位はN－83°－Eを示す。カマドは東壁のやや北寄りに付設されている。左袖部には凝灰岩の切石ブロックが、右袖部には円礫が遺存している。袖部の下部は黒褐色土で、上部はにぶい黄褐色粘土で構築されていたものと推測される。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には掘形を有する。中央部、カマドとカマドの反対側を残して、両側をそれぞれ「コ」の字状に掘り込んでいる。柱穴は検出していない。

遺物は、土師器甕（1～4）、黒色土器塊（5～7）・鉢（8）、須恵器坏（9）、石製紡錘車（10）のほか、土師器片139点、黒色土器片31点、須恵器片6点が出土している。2・8は床面下の掘形から、ほかは覆土中からの出土である。1～4は土師器甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。5～8は黒色土器で、内面に黒色処理が施される。5～7は塊で、いずれも体部下端に回転ヘラケズリ調整が施される。8は鉢である。外面胴部は縦位のヘラケズリ調整である。9は須恵器の坏で、底部は右回転ヘラ切り無調整である。底径が小さく体部は直線的に大きく開く。10は安山岩製の紡錘車である。側面に多角形状となる平坦な加工面をもち、中央の孔は両側から穿孔されている。未成品の可能性がある。

SI11（第23図、PL10・28）

調査区北側のL6・M6区に位置する。牛蒡栽培によるトレンチャー痕が顕著で全体に遺存状況は不良である。北東側は畑耕作による削平と攪乱を受ける。平面形は横長の長方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、

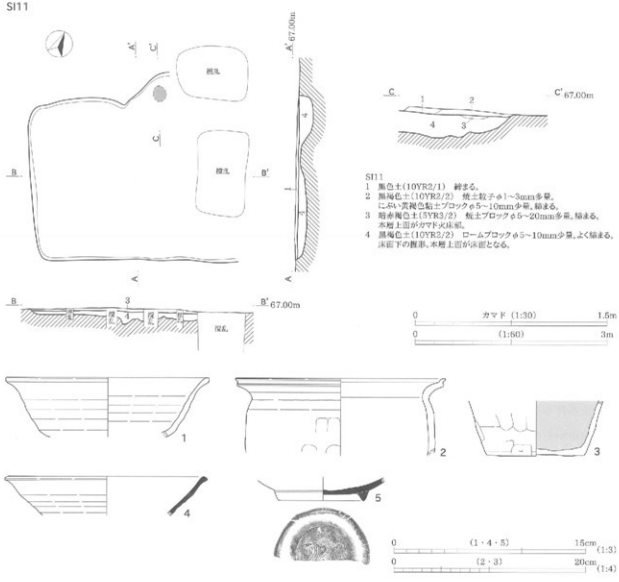


第22図　SI10実測図・出土遺物

表12　SI10出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	16.0	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	にぶい橙	長・石・雲・赤	口縁～胴	覆土・掘形
2	土師器	甕	[19.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	にぶい橙	長・石・雲	口縁～胴	貼床
3	土師器	甕	[19.6]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	橙	長・石・雲	口縁～胴	覆土・掘形
4	土師器	甕	-	-	8.0	外面：胴部横位ヘラケズリ、内面：胴部上位はヨコクロナデ、以下はナデ。底部：ヘラケズリ。	橙	長・石・雲	胴～底	覆土・ｐｉｔ１・掘形
5	黒色土師	坏	13.2	4.15	6.8	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。内面：黒色処理、ミガキ。底部：回転ヘラケズリ。	にぶい橙	長・石・雲	完形	覆土
6	黒色土器	坏	13.5	5.1	6.0	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。内面：黒色処理、ミガキ。底部：回転ヘラケズリ。	にぶい橙	長・石・雲	口縁～底	覆土
7	黒色土器	坏	[14.0]	-	-	外面：ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ。内面：黒色処理、ミガキ。	にぶい黄橙	長・石	口縁～体	覆土
8	黒色土師	坏	[19.6]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、体部横位ヘラケズリ。内面：黒色処理、横位ミガキ。	にぶい黄橙	長・石・骨・雲	口縁～体	掘形
9	弥生器	坏	14.1	4.9	6.3	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底部：右回転ヘラ切り。	灰	長・石・骨・雲	完形	覆土

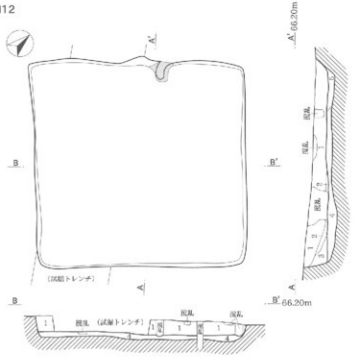
番号	種別	器種	計測値（cm、g）				成形等の特徴	石材	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量			
10	石製品	紡錘車	7.0	7.0	1.6	82.0	孔径0.7cm、側面は多角形状に面取る。	安山岩	覆土



第23図　SI11実測図・出土遺物

表13　SI11出土遺物観察表

番号	種　別	器　種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色　調	胎　土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	[15.8]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	橙	長・石・雲・骨多	口縁～体	覆土
2	土師器	甕	[22.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ。胴部縦位ヘラケズリ。 折衷：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい黄褐	長・石・雲	口縁～胴	覆土
3	黒色土器	鉢	-	-	[10.0]	外面：胴部横位ヘラケズリ、胴部下端横位ヘラケズリ。内面：胴部ナデ。黒色処理、横位ミガキ。	にぶい赤褐	長・石	体～底	覆土
4	須恵器	坏	[15.3]	-	-	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	灰白	長・石	口縁～体	覆土
5	須恵器	高台付坏	-	-	6.7	底部：右回転糸切り。	灰	長・石	体～底	覆土



SI12
1　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子φ1～3mm多量。ロームブロックφ10～30mm多量。締まる。
2　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子φ1～3mm少量。締まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子φ1～3mm少量。ロームブロックφ10～40mm少量。締まる。
4　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロックφ10～40mm大量。よく締まる。焼形覆土。
　床面下の掘形。本層上面が床面となる。
5　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロックφ10～20mm少量。黒色土少量。よく締まる。
　床面下の掘形。本層上面が床面となる。

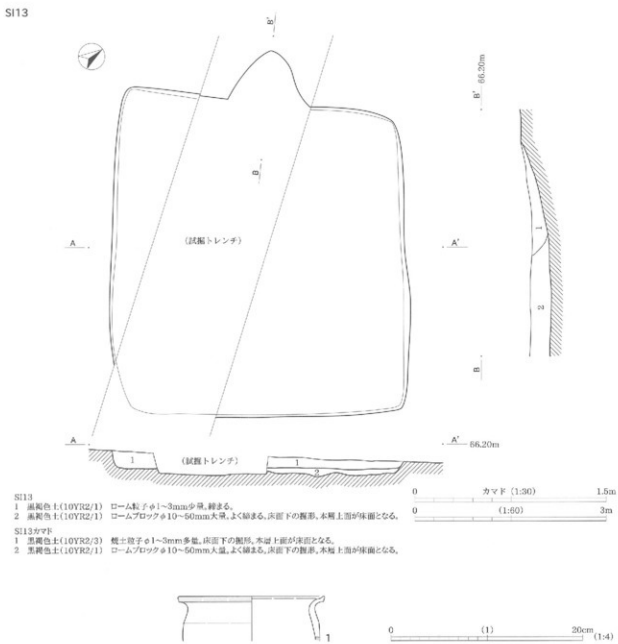
第24図　SI12実測図

長軸3.20m以上、短軸2.40m、壁高0.05mで、主軸方位はN－26°－Wを示す。カマドは北西壁に付設されている。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には不整形な掘形を有する。柱穴は検出していない。

遺物は、土師器坏（1）・甕（2）、黒色土器鉢（3）、須恵器坏（4）・高台付坏（5）のほか、土師器片82点、黒色土器片８点、須恵器片２点が出土している。床面下の掘形から出土した甕（2）などの数点を除き、すべて覆土中からの出土である。1は土師器の坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。2は甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。3は黒色土器の鉢で、内面に黒色処理が施される。4は須恵器の坏である。体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁端部は僅かに外方へつまみ出されて断面三角形状となる。5は高台付坏である。底部に断面三角形状を呈する低い高台を貼り付けるもので、高台内の中央には回転糸切り痕が残る。

SI12（第24図、PL10・11）

調査区北側のJ4区に位置する。牛蒡栽培によるトレンチャー痕が顕著で全体に遺存状況は不良である。中



第25図　SI13実測図・出土遺物

表14　SI13出土遺物観察表

番号	種　別	器　種	計測値（cm）			成形・製作等の特徴	色　調	胎　土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	[16.0]	-	-	外面：口縁部ヨコナデ。内面：口縁部ヨコナデ。	橙	長・石・雲・骨・赤	口縁～胴	覆土

央から南西側は試掘調査時のトレンチによって切られる。平面形は方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸3.18m、短軸3.15m、壁高0.35mで、主軸方位はN－49°－Wを示す。カマドは北西壁の中央に付設されている。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には浅く不整形な掘形を有する。柱穴は検出していない。

遺物は出土していない。

SI13（第25図、PL11・28）

調査区北側のI3・J3・I4・J4区に位置する。牛蒡栽培によるトレンチャー痕が顕著で全体に遺存状況は不

良である。中央から南西側は試掘調査時のトレンチによって切られる。平面形はやや縦長の方形を呈し、壁は急斜度に立ち上がる。規模は、長軸3.15m、短軸2.80m、壁高0.18mで、主軸方位はN－56°－Wを示す。カマドは北西壁の中央に付設されている。床面は平坦で、特に硬化した箇所はみとめられない。床面下には浅く不整形な掘形を有する。竪穴内外を精査したが柱穴は検出していない。

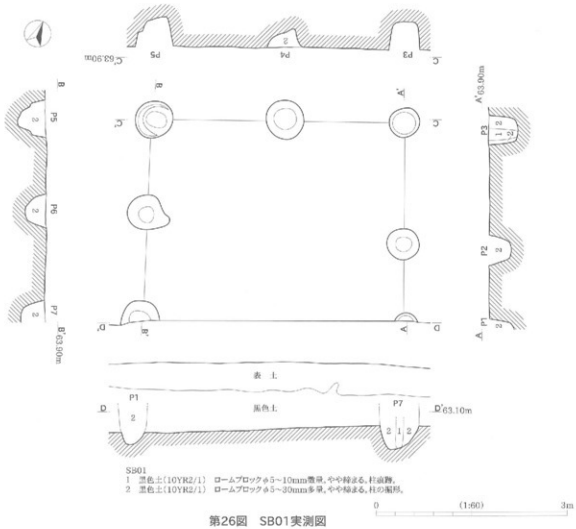
遺物は、覆土中から土師器甕（1）のほか、土師器片1点、縄文土器片1点が出土している。1は土師器の甕である。口縁部が短く頸部で「く」の字状に外反するもので、口縁端部は短くつまみ上げられる。

2）掘立柱建物

SB01（第26図、PL11）

調査区北側のH19区に位置し、南東側はさらに調査区外へ延びる。梁間2間（3.90m）×桁行2間（3.15m）以上の側柱建物と思われる。桁行方位はN－22°－Wを示す。柱の掘形は、平面形は円形で断面形は「U」字状あるいは台形状となる。規模は、直径0.45～0.70m、深さ0.32～0.45mで、P3とP7で確認された柱痕跡の直径は0.13～0.18mである。このうち隅柱であるP3とP5は、ほかの柱穴と比べてやや深めに掘り込まれている。

出土遺物がなく帰属時期は不明であるが、建物の桁行方位が竪穴住居の主軸方位とほぼ一致することから奈良・平安時代の建物である可能性が高いと考えられる。



第26図　SB01実測図

C 中　世

中世の遺構は、地下式坑12基を検出した。

1）地下式坑

地下式坑は、調査区東側の台地縁辺部にあるSK26を除き、すべて調査区南側から検出した。天井部が遺存しているものはないが、いずれも地下室は単室で、竪坑の平面形状はおおむね円形と思われる。

SK05（第27図、PL13）

調査区南側のV19区に位置する。地下室の平面形は横長の不整長方形を呈し、竪坑は北側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径1.54m、短径1.26m、壁高1.32mで、これに幅0.40m、長さ0.55mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－16°－Eを示す。覆土は3層からなり、検出時、最上層である1層の上面は一部空洞となっていた。

遺物は出土していない。

SK10（第27図、PL13）

調査区南側のR13区に位置する。SK11を切る。地下室の平面形は横長の長方形を呈し、竪坑は南東側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径1.56m、短径1.00m、壁高0.90mで、これに幅0.48m、長さ0.75mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－122°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SK12（第28図、PL13）

調査区南側のP16区に位置する。北西側はSK13と重複するが新旧関係については不明である。地下室の平面形は横長の長方形を呈し、竪坑は北側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部には低い段を有する。地下室の規模は長径1.22m、短径0.85m、壁高0.56mで、これに幅0.48m、長さ0.45mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－5°－Eを示す。

遺物は、覆土中から縄文土器片が1点出土している。

SK13（第28図、PL13・14）

調査区南側のP16区に位置する。南東側はSK12と重複するが新旧関係については不明である。地下室の平面形は横長の不整長方形を呈し、竪坑は南側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部には低い段を有する。地下室の規模は長径1.58m、短径1.24m、壁高0.96mで、これに幅1.13m、長さ1.28mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－170°－Wを示す。

遺物は、覆土中から土師器片が1点出土している。

SK14（第29図、PL14）

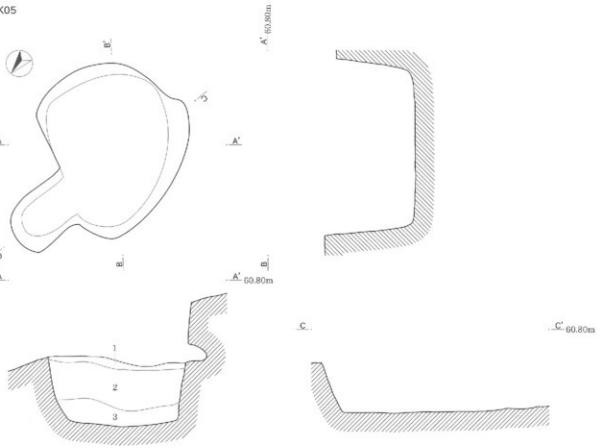
調査区南側のQ16区に位置する。地下室の平面形は横長の長方形を呈し、竪坑は南側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径1.64m、短径1.30m、壁高1.02mで、これに幅0.64m、長さ0.88mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－168°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SK15（第29図、PL14）

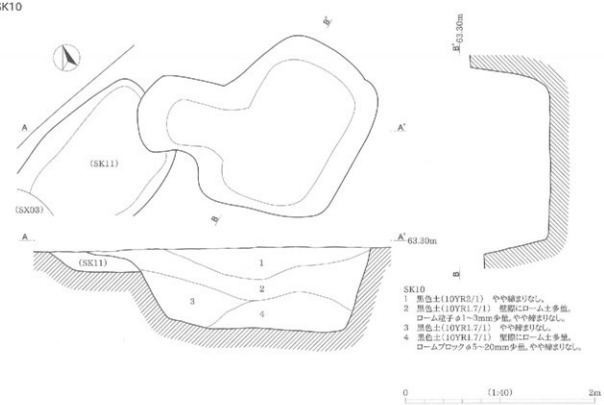
調査区南側のP17区に位置する。地下室の平面形は横長の長方形を呈し、竪坑は南東側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径3.10m、短径2.05m、壁高1.88mで、これに幅0.72m、

SK05



SK06
1　黒褐色土(7.5YR3/2)　赤褐色焼石粒φ2～3mm少量、やや締まりなし。※1層の上面は空洞となっていた。
2　黒色土(7.5YR2/1)　部分的にローム土を薄く層状に挟む。礫φ50～250mm少量、締まりなし。
3　黒色土(10YR1.7/1)　締まりなし。

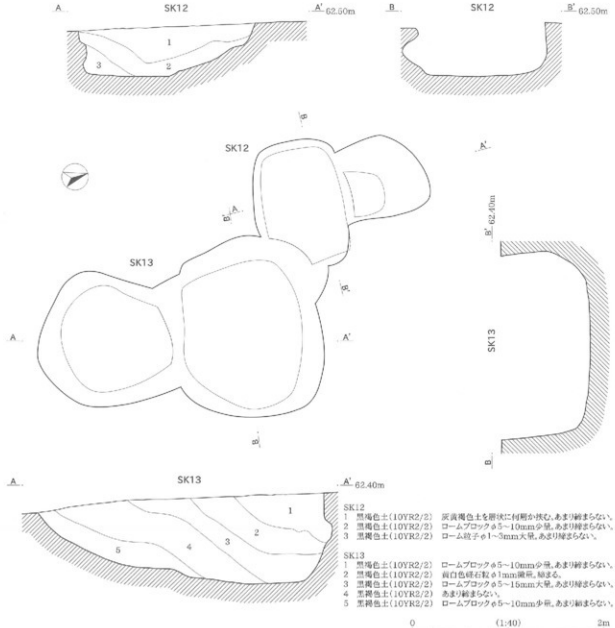
SK10



SK10
1　黒色土(10YR2/1)　やや締まりなし。
2　黒色土(10YR1.7/1)　壁際にローム土多量。
ローム粒子φ1～3mm少量、やや締まりなし。
3　黒色土(10YR1.7/1)　やや締まりなし。
4　黒色土(10YR1.7/1)　壁際にローム土多量。
ロームブロックφ5～20mm少量、やや締まりなし。

0　(1:40)　2m

第27図　SK05・10実測図



第28図　SK12・13実測図

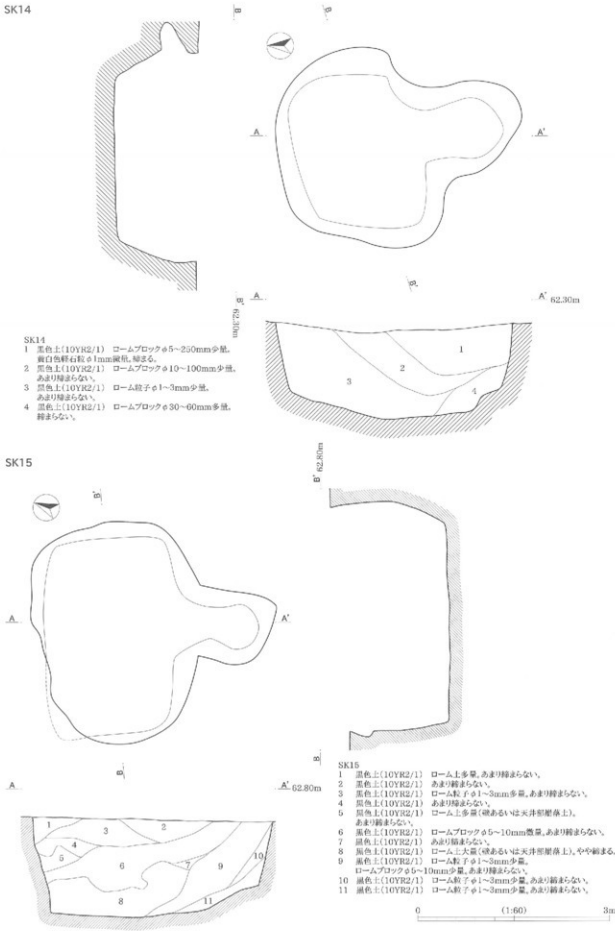
長さ1.30mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－155°－Eを示す。

遺物は、1～5層から径10～15cmほどの礫21点が出土したほか、覆土中から縄文土器片7点、土師器片6点、須恵器片3点が出土している。

SK16（第30図、PL14・15）

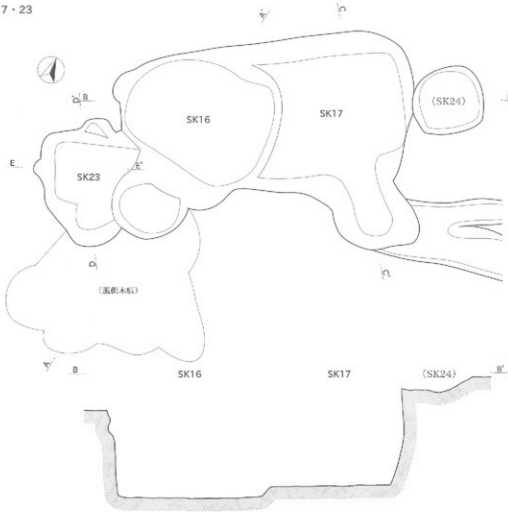
調査区南側のP17区に位置する。SK17・23を切る。地下室の平面形は横長の不整長方形を呈し、竪坑は北側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部には低い段を有する。地下室の規模は長径2.25m、短径1.70m、壁高1.75mで、これに幅0.93m、長さ1.20mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－174°－Wを示す。

遺物は出土していない。



第29図　SK14・15実測図

SK16・17・23

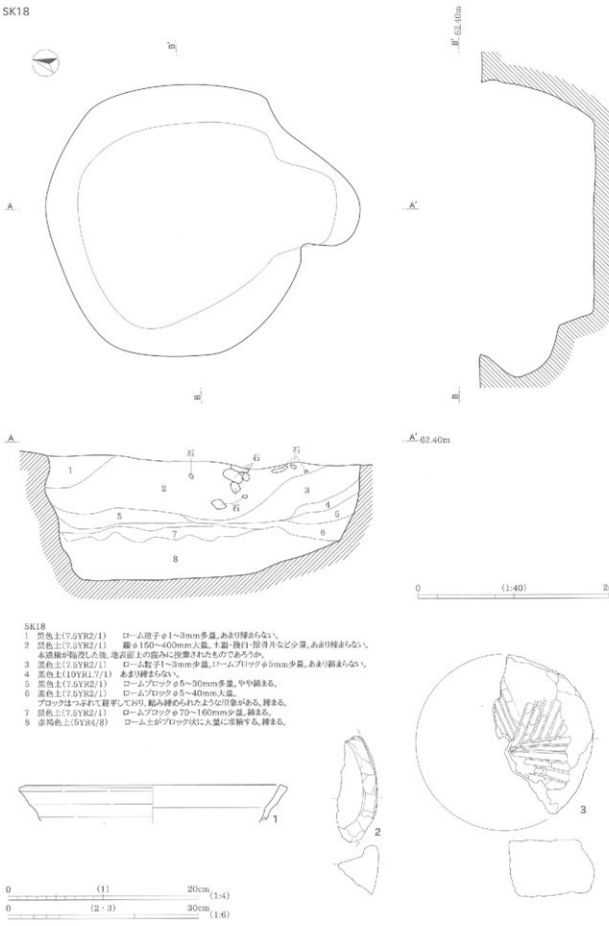


SK16
1 黒色土(7.5YR2/1) あまり締まらない。
2 黒色土(7.5YR2/1)
ローム粒子φ1~2mm少量、あまり締まらない。
3 黒色土(7.5YR2/1)
ローム粒子φ1~2mm少量、あまり締まらない。
4 黒色土(7.5YR2/1) ローム土多量、あまり締まらない。
5 黒色土(7.5YR2/1) あまり締まらない。
6 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ5~10mm多量、締まる。
7 黒色土(7.5YR2/1) ローム土多量、あまり締まらない。
8 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ5~40mm多量、あまり締まらない。
9 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ5~25mm多量、あまり締まらない。
10 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ10~50mm大量、あまり締まらない。

SK17
1 黒色土(7.5YR2/1) 礫φ100~250mm多量、炭化木片φ3~5mm少量。
あまり締まらない。人為積が堆積した後、地表面上の窪みに投棄されたものであろうか。
2 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm多量、あまり締まらない。
3 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm少量、あまり締まらない。
4 黒色土(7.5YR2/1) ローム土多量、あまり締まらない。
5 黒色土(7.5YR2/1) 炭化木片φ5~10mm微量、あまり締まらない。
6 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm少量、あまり締まらない。
7 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ5~30mm多量、あまり締まらない。
8 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm多量。
炭化木片φ5~10mm微量、あまり締まらない。
9 黒色土(7.5YR2/1) ローム土多量、あまり締まらない。
10 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm大量。
ロームブロックφ5~15mm少量、あまり締まらない。
11 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm少量、あまり締まらない。
12 黒色土(7.5YR2/1) ローム粒子φ1~3mm多量。
ロームブロックφ5~10mm少量、あまり締まらない。

0 (1:60) 3m

第30図 SK16・17・23実測図



第31図　SK18実測図・出土遺物

表15　SK18出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存率他	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	内耳土鍋	[30.0]	-	-		にぶい黄橙	長・石・骨	1/8	覆土

番号	種別	器種	計測値（cm、g）				成形等の特徴	石材	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量			
2	石製品	石臼	-	-	6.4	(541.9)	上臼。	玄武岩	覆土
3	石製品	石臼			14.7	(3,500.0)	下臼。臼面の目は6分画。	玄武岩	覆土

SK17（第30図、PL14・15）

調査区南側のP17・P18区に位置する。南西側をSK16に切られる。地下室の平面形は横長の不整長方形を呈し、竪坑は南東側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は2.40m以上、短径1.80m、壁高1.60mで、これに幅0.55m、長さ1.20mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－140°－Eを示す。

遺物は、1層中から径10～25cmほどの礫64点が出土したほか、覆土中から土師器片20点、黒色土器片1点、須恵器片5点が出土している。

SK18（第31図、PL14・15・28）

調査区南側のQ16区に位置する。地下室の平面形は不整方形を呈し、竪坑は南側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径2.10m、短径2.00m、壁高1.33mで、これに幅0.80m、長さ0.58mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－161°－Eを示す。

遺物は、2層中から径15～40cmほどの礫593点、獣骨片などが出土したほか、覆土中から内耳土鍋1点（1）、石臼2点（2・3）などが出土している。1は内耳土鍋の口縁部片で、口縁部は体部から「く」の字状に屈曲して開く器形となる。外面にはススが付着する。2・3は石臼である。2は上臼の小破片である。3は下臼で約1/3が遺存する。臼面の目は6分画と思われ、副溝は5本確認できる。ともに石材は玄武岩である。ほかに用途不明の石製品片1点、土師器片3点が出土している。

SK23（第30図、PL14・15）

調査区南側のP17区に位置する。北東側をSK16に切られる。地下室の平面形は横長の長方形を呈し、竪坑は南側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径1.30m以上、短径0.95m、壁高0.76mで、これに幅0.60m以上、長さ0.40mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－161°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SK26（第32図、PL15）

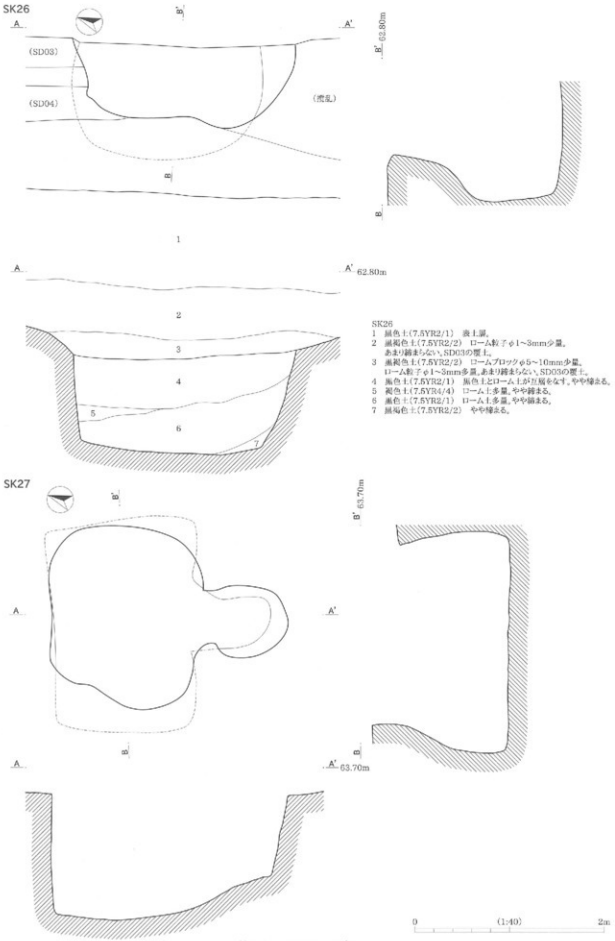
調査区東側のJ24区に位置し、東側はさらに調査区外へ延びる。台地縁辺部に位置するもので、SD03・04に切られる。地下室と思われる一部を検出しただけであるが、掘り込みの規模が大きいこと、壁上半がオーバーハングしていることなどから地下式坑と判断した。地下室の平面形は長方形あるいは方形を呈するものと思われ、規模は長径2.20m、短径1.20m以上、壁高1.30mである。

遺物は出土していない。

SK27（第32図、PL15・28）

調査区南側のP18区に位置する。SI01・03を切る。地下室の平面形は横長の不整長方形を呈し、竪坑は南側に短く突出する。竪坑と地下室の連結部は無段である。地下室の規模は長径2.25m、短径1.48m、壁高1.45mで、これに幅0.52m、長さ0.80mの竪坑が付く。竪坑を基準にした主軸方位はN－160°－Eを示す。

遺物は、覆土上層から馬の下顎骨と思われる骨片（1）が出土している（写真掲載のみ）。



第32図　SK26・27実測図

D 近　世

近世の遺構は、土坑墓7基を検出した。

1）地下式坑

土坑墓は、調査区南側の南東寄りから7基検出した。土坑墓の平面形状は、方形（SK03・04・19・20）、円形（SK07・21）、楕円形（SK02）の3種類がある。いずれも底部付近から座棺で埋葬されたと考えられる遺存不良の人骨が出土しているほか、六道銭と見られる寛永通宝や煙管などが出土している。ほかに特殊な出土遺物としてSK21から伏鉦、SK19から漆器などが出土している。

SK02（第33図、PL16・28）

調査区南側のV18区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状となる。規模は、長径0.58m、短径0.38m、深さ0.20mである。長軸方位はN－69°－Eを示す。本遺構の南東側には4.00m離れて、同じく土坑墓であるSK03とSK04が並んで位置している。これら3基の土坑墓は、いずれも谷状地形に長軸が直交するようなかたちで緩斜面部に構築されている。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、煙管1点（1）が底部付近から出土している。1は煙管の雁首である。火皿補強体や肩付は付かず、脂返しの湾曲は小さい。銅製の鍛造品で、小口には竹製の羅宇（吸管）が一部遺存する。

SK03（第33図、PL16・28）

調査区南側のV19区に位置する。平面形は方形で、断面形は箱状となる。規模は、長径0.75m、短径0.75m、深さ0.32mである。長軸方位はN－64°－Eを示す。本遺構の南側には0.28m離れてSK04が隣接して位置している。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、寛永通宝6点（1～4）、煙管1点（5）が底部付近から出土している。1～4は銅製の寛永通宝である。4は3枚が銹着したもので、合計で6枚出土している。1・2は古寛永、3・4は新寛永文銭である。5は煙管の吸口で、肩付は付かない。銅製の鍛造品で、小口には竹製の羅宇が一部遺存する。

SK04（第33図、PL16・28）

調査区南側のV19区に位置する。平面形は方形で、断面形は箱状となる。規模は、長径0.75m、短径0.73m、深さ0.45mである。長軸方位はN－62°－Eを示す。前述したSK03とは形状・規模ともに近似する。

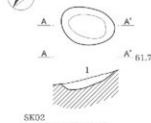
遺物は、遺存不良の人骨のほか、寛永通宝6点（1～6）、煙管1点（7）が底部付近から出土している。1～6は銅製の寛永通宝で、1～3は古寛永、4～6は新寛永である。7は煙管の吸口で、肩付は付かない。銅製の鍛造品である。

SK07（第34図、PL17・29）

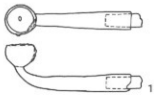
調査区南側のU15区に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.16m、短径1.10m、深さ0.80mである。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、寛永通宝10点（1～10）、煙管2点（11・12）が底部付近から出土している。1～10は銅製の寛永通宝で、1～8は古寛永、9・10は新寛永文銭である。11・12は煙管である。11は雁首である。火皿補強体や肩付は付かず、脂返しの湾曲は小さい。12は煙管の吸口で、肩付は付かない。銅製の鍛造品で、小口にはそれぞれ竹製の羅宇が一部遺存する。雁首と吸口が一組出土しているが、小口径や羅宇

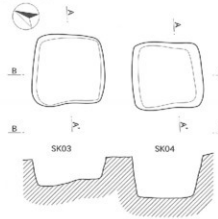
SK02

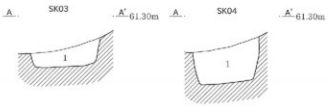


SK02
1　黒褐色土(5YR3/1)
　ローム・ブロックφ5～10mm少量、締まりなし。



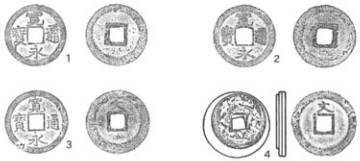
SK03・04



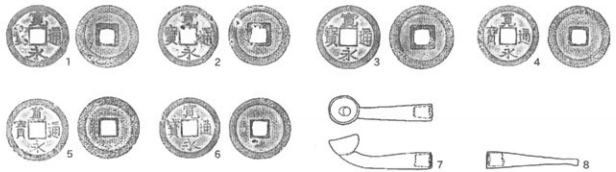


SK03
1　黒褐色土(7.5YR3/2)
　ローム・ブロックφ5～10mm少量、締まりなし。
SK04
1　黒褐色土(7.5YR3/2)
　ローム・ブロックφ10～50mm多量、締まりなし。

SK03

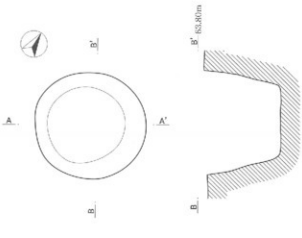


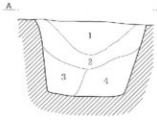
SK04



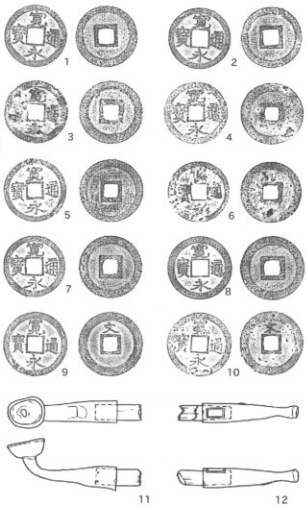
第33図　SK02・03・04実測図・出土遺物

SK07

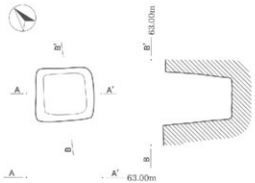




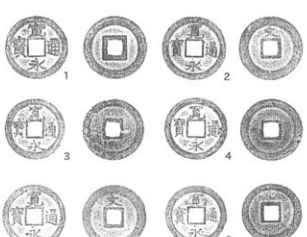
SK07
1　黒褐色土(7.5YR2/2)　ロームブロックφ10～50mm多量。
　ローム粒子φ1～3mm多量、締まらない。
2　黒褐色土(7.5YR2/2)　ロームブロックφ10～30mm大量。
　ローム粒子φ1～3mm多量、締まらない。
3　黒色土(7.5YR2/1)　ロームブロックφ5～30mm大量。
　ローム粒子φ1～3mm大量、締まらない。
4　黒色土(7.5YR2/1)　ロームブロックφ5～20mm多量、締まらない。

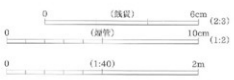


SK19

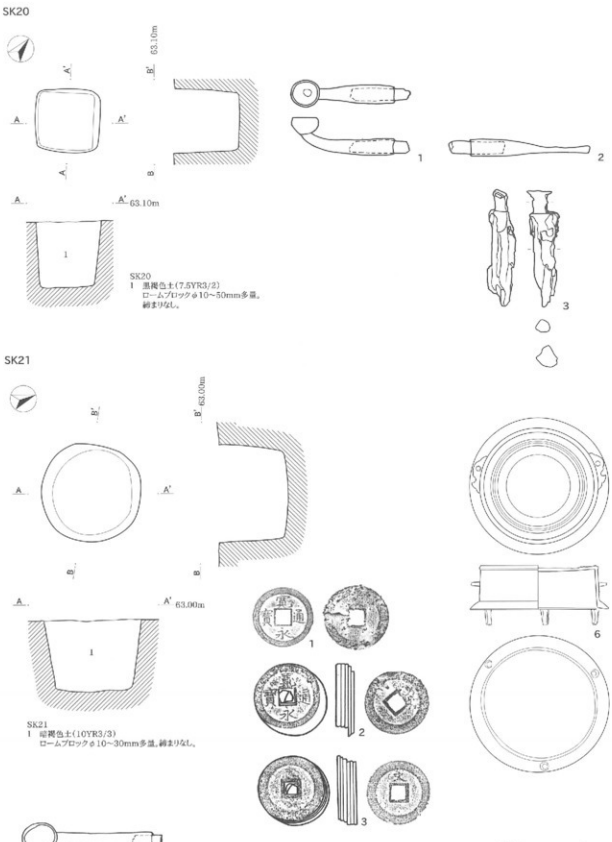


SK19
1　黒褐色土(7.5YR3/2)
　ロームブロックφ10～50mm多量、締まりなし。





第34図　SK07・19実測図・出土遺物



第35図　SK20・21実測図・出土遺物

表16　SK02出土遺物観察表

番号	種別	器種	雁首 (cm, g)				吸口 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口付径	長さ	重量		
1	銅製品	煙管	1.6	1.6	7.2	9.0	-	-	-	-	雁首。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層

表17　SK03出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			外形	孔径	厚さ	重量		
1	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.6	古寛永。	覆土下層
2	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.8	古寛永。	覆土下層
3	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.5	新寛永文銭。	覆土下層
4	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6/0.6	0.4	9.7	新寛永文銭。3枚銹着。	覆土下層

番号	種別	器種	雁首 (cm, g)				吸口 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口付径	長さ	重量		
5	銅製品	煙管		-	-	-	1.0	0.3	5.5	4.0	吸口。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層

表18　SK04出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			外形	孔径	厚さ	重量		
1	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	4.0	古寛永。	覆土下層
2	銭貨	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	3.8	古寛永。	覆土下層
3	銭貨	寛永通宝	2.6	0.6	0.1	3.9	古寛永。	覆土下層
4	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.7	新寛永。	覆土下層
5	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	2.9	新寛永。	覆土下層
6	銭貨	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	2.4	新寛永。	覆土下層

番号	種別	器種	雁首 (cm, g)				吸口 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口付径	長さ	重量		
7	銅製品	煙管	1.6	0.9	5.5	4.9	-	-	-	-	雁首。竹製羅宇が一部遺存。	
8	銅製品	煙管	-	-	-	-	0.9	0.2	4.8	2.8	吸口。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層

表19　SK07出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			外形	孔径	厚さ	重量		
1	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	2.9	古寛永。	覆土下層
2	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.7	古寛永。	覆土下層
3	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.0	古寛永。	覆土下層
4	銭貨	寛永通宝	2.5	0.5	0.1	2.5	古寛永。	覆土下層
5	銭貨	寛永通宝	2.5	0.5	0.1	3.6	古寛永。	覆土下層
6	銭貨	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	3.0	古寛永。	覆土下層
7	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.6	古寛永。	覆土下層
8	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.5	古寛永。	覆土下層
9	銭貨	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.3	新寛永文銭。	覆土下層
10	銭貨	寛永通宝	2.6	0.6	0.1	3.8	新寛永文銭。	覆土下層

番号	種別	器種	雁首 (cm, g)				吸口 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口付径	長さ	重量		
11	銅製品	煙管	1.9	1.2	5.8	6.9	-	-	-	-	雁首。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層
12	銅製品	煙管	-	-	-	-	1.1	0.4	5.0	4.9	吸口。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層

表20　SK19出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			外形	孔径	厚さ	重量		
1	銭貨	寛永通宝	2.6	5.9	0.1	3.8	古寛永。	覆土下層
2	銭貨	寛永通宝	2.6	5.7	0.1	3.6	新寛永文銭。	覆土下層
3	銭貨	寛永通宝	2.4	5.6	0.1	3.4	新寛永。	覆土下層
4	銭貨	寛永通宝	2.4	5.9	0.1	3.4	新寛永。	覆土下層
5	銭貨	寛永通宝	2.5	5.7	0.1	3.7	新寛永。	覆土下層
6	銭貨	寛永通宝	2.4	5.8	0.1	2.5	新寛永。	覆土下層

表21　SK20出土遺物観察表

番号	種別	器種	雁首 (cm, g)				吸口 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口付径	長さ	重量		
1	銅製品	煙管	1.5	0.9	6.2	7.2	-	-	-	-	雁首。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層
2	銅製品	煙管	-	-	-	-	0.8	0.3	7.3	4.3	吸口。竹製羅宇が一部遺存。	覆土下層

番号	種別	器種	計測値 (cm, g)				成形等の特徴	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量		
3	鉄製品	釘	6.1	0.6	0.3	5.2	木片が付着。	覆土下層

表22　SK21出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm, g）				成形等の特徴	出土位置
			外形	孔径	厚さ	重量		
1	銭貨	寛永通宝	2.6	0.6	0.1	3.5	新寛永文銭。	覆土下層
2	銭貨	寛永通宝	2.8	0.6	0.6	17.8	新寛永文銭。5枚錆着。	覆土下層
3	銭貨	寛永通宝	2.7	0.6/0.6	0.8	21.3	新寛永文銭。6枚錆着。	覆土下層

番号	種別	器種	雁首（cm, g）				吸口（cm, g）				成形等の特徴	出土位置
			火皿径	小口径	長さ	重量	小口径	口行径	長さ	重量		
4	銅製品	煙管	1.8	1.1	7.3	10.8	-	-	-	-	雁首。竹製雁甲が一部遺存。	覆土下層
5	銅製品	煙管	-	-	-	-	1.1	0.3	7.2	6.3	吸口。竹製雁甲が一部遺存。	覆土下層

番号	種別	器種	計測値（cm, g）				成形等の特徴	出土位置
			下端径	下端径	高さ	重量		
6	銅製品	伏鉦	9.0	10.8	4.8	348.0	完形品。	覆土下層

径が異なることから別個体である可能性が考えられる。

SK19（第34図、PL17・29）

調査区南側のP22区に位置する。平面形は方形で、断面形は箱状となる。規模は、長径0.66m、短径0.66m、深さ0.72mである。長軸方位はN－51°－Wを示す。本遺構の西側には0.30m離れてSK20が隣接して位置している。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、寛永通宝6点（1～6）が底部付近から出土している。1～6は銅製の寛永通宝で、1は古寛永、2は新寛永文銭、3～6は新寛永である。ほかに漆器が1点出土しているが、木胎は腐朽して赤色の塗膜だけが遺存している状況であった。

SK20（第35図、PL17・29）

調査区南側のP22区に位置する。平面形は方形で、断面形は箱状となる。規模は、長径0.68m、短径0.68m、深さ0.70mである。長軸方位はN－38°－Wを示す。長軸方位は異なるが、前述したSK19とは形状・規模ともに近似する。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、煙管2点（1・2）、釘1点（3）が底部付近から出土している。1・2は煙管である。1は雁首である。火皿補強体や肩付は付かず、脂返しの湾曲は小さい。2は煙管の吸口で、肩付は付かない。銅製の鍛造品で、小口にはそれぞれ竹製の羅宇が一部遺存する。1・2で一組の製品と考えられる。3は鉄製の釘で、鋳造品と思われる。一部、木片が付着する。

SK21（第35図、PL17・29）

調査区南側のR21区に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.04m、短径1.02m、深さ0.76mである。

遺物は、遺存不良の人骨のほか、寛永通宝12点（1～3）、煙管2点（4・5）、伏鉦1点（6）が底部付近から出土している。1～3は銅製の寛永通宝で、2は5枚、3は6枚が錆着しており、合計12枚出土している。確認できたものは、いずれも新寛永文銭である。4・5は煙管である。4は雁首である。火皿補強体や肩付は付かず、脂返しの湾曲は小さい。5は煙管の吸口で、肩付は付かない。銅製の鍛造品で、吸口の小口にはそれぞれ竹製の羅宇が一部遺存する。4・5で一組の製品と考えられる。6は伏鉦である。上面には、二重界線を一重巡らせ、中央には鎮座区を設けている。側面には、径4mmほどの孔が穿たれた鰭状を呈する耳が2個付いている。置いて叩く伏鉦には、もとより鉦鼓のような懸垂のための耳は不要であるが、形状的に鉦鼓の名残を留めたものと思われる。下端部は断面直角三角形状を呈し、内側を1mmほど浮き上がらせて外側へ斜行させる形となる。下端部の下面には断面台形状となる短い脚が3個配される。銅製の鋳造品である。

E その他

時期不明の遺構として、井戸1基、粘土貼り土坑1基、土坑10基、竪穴状遺構3基、溝8条がある。帰属時期を特定できるような出土遺物がないため明確には判断できないが、覆土や遺構の位置関係などから見て、中世あるいは近世以降の所産であろうと推測される。

1）井　戸

SE01（第36図、PL18）

調査区南側のU19区に位置する。谷状を呈する地下地形の谷口部にあたる場所で、当台地上で地下水を得ようと考えた場合、もっとも有望な場所である。安全上の問題で底部までは完掘していないが、井戸側が設置されていたような痕跡は見られない。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径0.73m、短径0.73m、深さ1.10m以上である。覆土は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、覆土中から拳大の円礫が数点出土している。

2）粘土貼り土坑

SK01（第36図、PL18・29）

調査区南側のU16・17区に位置し、南側はさらに調査区外へ延びる。平面形は長方形で、断面形は台形状となる。規模は、長径1.80m以上、短径1.70m、深さ0.68mである。長軸方位はN－24°－Wを示す。遺構内には底部から側壁にかけて4cm前後の厚さで灰色粘土を貼り付けている。本遺構の用途や機能については不明であるが、水槽状の形状を呈していることから水溜あるいは貯蔵庫として利用されたのではないかと推測される。

遺物は、覆土中から拳大の円礫が数点出土したほか、内耳土鍋1点（1）が出土している。1は内耳土鍋の口縁部片である。口縁部はやや内湾し、口縁部と胴部の境には段を有する。

3）土　坑

SK06（第36図、PL18）

調査区南側のU16区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は階段状となる。規模は、長径2.05m、短径1.15m、深さ1.04mである。長軸方位はN－45°－Wを示す。谷状地形に対して長軸が平行するかたちで谷底に近い斜面部に構築している。

遺物は出土していない。

SK08（第36図、PL18）

調査区南側のU17区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状となる。規模は、長径1.40m、短径1.15m、深さ0.53mである。長軸方位はN－57°－Wを示す。谷状地形に対して長軸が平行するかたちで緩斜面部に構築している。

遺物は出土していない。

SK09（第37図、PL19）

調査区南西側のS10区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状となる。規模は、長径1.60m、短径1.35m、深さ1.06mである。長軸方位はN－65°－Wを示す。緩斜面部に構築している。

遺物は出土していない。

SK11（第37図、PL19）

調査区南側のR14区に位置する。南西側は中世の地下式坑であるSK10に切られ、北東側は攪乱を受けている。平面形は長方形で、断面形は弧状となる。規模は、長径1.75m以上、短径1.25m、深さm0.28である。長軸方位はN－62°－Eを示す。

遺物は、覆土中から不明陶器片1点、須恵器片2点が出土している。

SK22（第37図、PL19）

調査区南側のS21区に位置する。南西側はSD02に切られる。平面形は楕円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.98m、短径1.62m、深さ0.65mである。長軸方位はN－44°－Wを示す。

遺物は出土していない。

SK24（第37図、PL19）

調査区南側のP18区に位置する。南西側は中世の地下式坑であるSK17を切る。平面形は円形で、断面形は弧状となる。規模は、長径1.20m、短径1.10m、深さ0.24mである。

遺物は、覆土中から須恵器片1点が出土している。

SK25（第38図、PL19・20）

調査区南側のO20区に位置する。北東側は奈良・平安時代の竪穴住居であるSI05を切る。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.82m、短径1.60m、深さ0.70mである。

遺物は出土していない。

SK29（第38図、PL20・29）

調査区北側のH2区に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.58m、短径1.56m、深さ0.58mである。底面に段あり。

遺物は、覆土中から火入1点（1）、擂鉢1点（2）が出土している。1は瀬戸の火入れで、底部から体部にかけての破片である。高台から体部にかけて直立する筒型の器形となり、体部外面には押印文が施文される。外面には緑釉が施され、内面は露胎となる。2は擂鉢の口縁部破片である。幅2.0cmで1単位7条の卸し目を持つ。

SK30（第38図、PL20・29）

調査区北側のH2区に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状となる。規模は、長径1.58m、短径1.44m、深さ0.52mである。

遺物は、覆土中から砥石1点（1）、鉄製品1点（2）が出土している。1は砥石の破片である。砥面は表裏に確認できる。石材はホルンフェルスである。2は用途不明の鉄製品の破片である。断面は平たい形状を呈する。

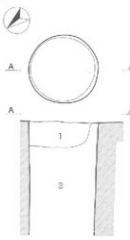
4）竪穴状遺構

SX01（第39図、PL20・29）

調査区南側のU15・V15区に位置し、南東側はさらに調査区外へ延びる。平面形は不整長方形で、断面形は弧状となる。規模は、長径6.70m、短径2.90m、深さ0.42mである。長軸方位はN－90°－Eを示す。底面は凹凸が顕著である。

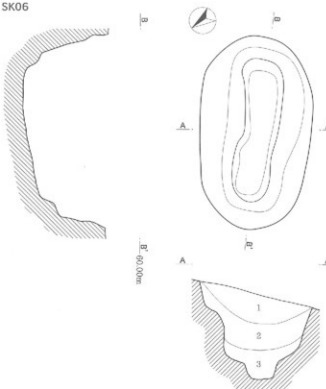
遺物は、覆土中から常滑焼1点（1）が出土している。1は常滑焼の片口鉢で、口縁部の破片である。ほかに土師器片2点、須恵器片3点が出土している。

SE01



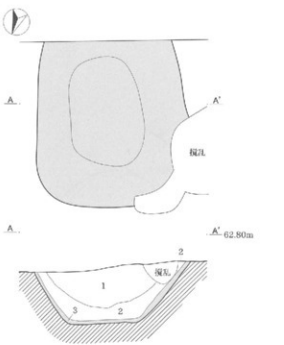
SE01
1　黒褐色土(5YR2/1)　あまり締まらない。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　ロームブロックφ5～20mm多量。
　炉礫φ80～120mm少量。あまり締まらない。

SK06



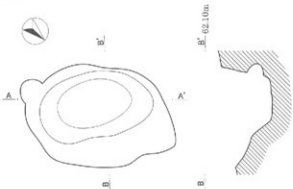
SK06
1　黒色土(7.5YR2/1)　黄白色・赤褐色粒石粒φ1～4mm少量。締まる。
2　黒色土(7.5YR2/1)　黄白色・赤褐色粒石粒φ1～4mm多量。締まる。
3　黒色土(7.5YR2/1)　黄白色・赤褐色粒石粒φ1～4mm少量。締まる。

SK01

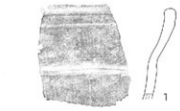


SK01
1　黒褐色土(7.5YR2/2)　ロームブロックφ10～60mm多量。やや締まりなし。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　ロームブロックφ5～20mm少量。
　灰色砂土ブロックφ20～40mm多量。やや締まりなし。
3　灰色砂土(7.5Y6/1)　層厚40mm前後。底部から斜球にかけて全面張り付け。

SK08



SK08
1　黒褐色土(5YR2/1)　締まる。
2　黒褐色土(7.5YR2/2)
　ロームブロックφ5～25mm多量。締まる。

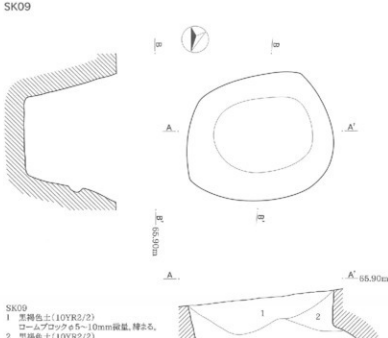


0　(1)　15cm　(1:3)

0　(1:40)　2m

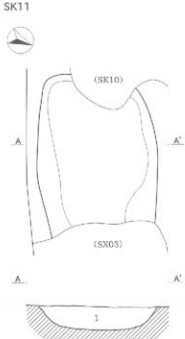
第36図　SE01・SK01・06・08実測図・出土遺物

SK09



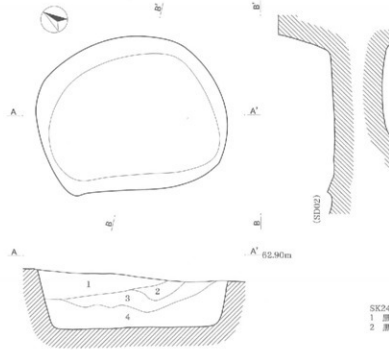
SK09
1 黒褐色土(10YR2/2)
ロームブロックφ5~10mm微量、締まる。
2 黒褐色土(10YR2/2)
ローム粒子φ1~3mm多量、締まる。
3 暗褐色土(10YR3/3)
ロームブロックφ20~40mm少量、締まる。

SK11



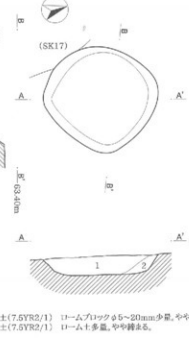
SK11
1 黒色土(10YR2/1)
ロームブロックφ5~20mm大量、やや締まりなし。

SK22



SK22
1 黒褐色土(10YR2/2) ローム土多量。
炭化木片φ5~10mm少量、やや締まる。
2 黒褐色土(10YR2/2) ローム土多量、やや締まる。
3 褐色土(7.5YR4/4) ローム土多量、やや締まる。
4 暗褐色土(7.5YR3/3) 黄色粘土ブロックφ10~50mm多量。
円礫φ120mm散乱、底面上に黒色土が薄く堆積する。やや締まる。

SK24

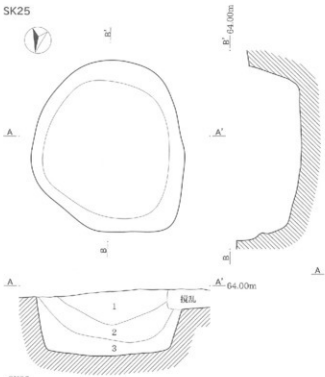


SK24
1 黒色土(7.5YR2/1) ロームブロックφ5~20mm少量、やや締まる。
2 黒色土(7.5YR2/1) ローム土多量、やや締まる。

0 (1:40) 2m

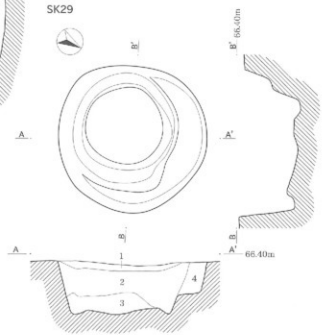
第37図 SK09·11·22·24実測図

SK25

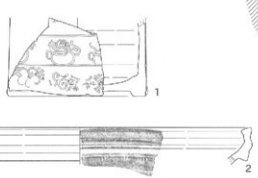


SK25
1 明褐色土(7.5YR5/6) ロローム土多量。やや締まる。
2 褐色土(7.5YR2/1) ロローム粒子φ1~3mm多量。締まらない。
3 褐色土(7.5YR2/1) ロローム土多量。締まらない。

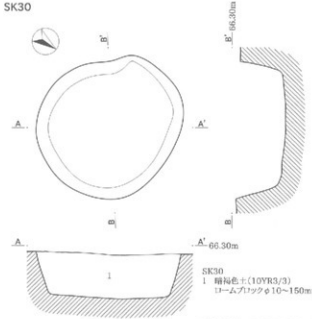
SK29



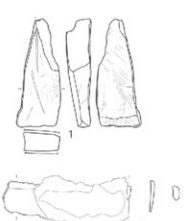
SK29
1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子φ1~3mm多量。やや締まる。
2 黒色土(10YR2/1) ロームブロックφ5~40mm大量。やや締まる。
3 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックφ5~20mm少量。やや締まる。
4 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒子φ1~3mm多量。締まる。

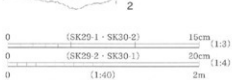


SK30

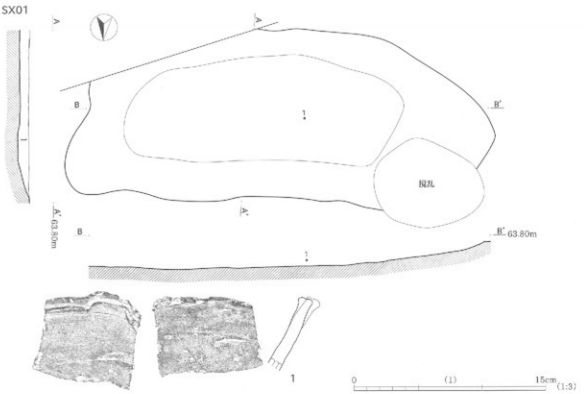


SK30
1 暗褐色土(10YR3/3)
ロローム ブロックφ10~150mm大量。やや締まる。





第38図　SK25・29・30実測図・出土遺物



第39図　SX01・02・03実測図・出土遺物

表23　SK01出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	内耳土鍋	-	-	-	口縁部と胴部の境に段を有する。	にぶい黄橙	長・石・雲・骨	口縁	覆土

表24　SK29出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	陶器	火入	-	-	[10.8]	組打痕。外面：押印文、篠縞。内面：篠縞。	褐	長・石・微	体～底	覆土
2	陶器	擂鉢	[35.0]	-	-	内面：擂り目。	橙暗赤褐	長・石	口縁	覆土

表25　SK30出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm，g）				成形等の特徴	石材	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量			
1	石製品	硯石	(11.4)	4.6	2.6	(128.5)		ホルンフェルズ	覆土

番号	種別	器種	計測値（cm，g）				成形等の特徴	出土位置
			長さ	幅	厚さ	重量		
2	炭製品	用途不明	(10.1)	4.0	0.6	(90.3)		覆土

表26　SX01出土遺物観察表

番号	種別	器種	計測値（cm）			成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	出土位置
			口径	器高	底径					
1	陶器	片口鉢	-	-	-	内面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	にぶい赤褐	長・石・雲	口縁	覆土

SX02（第39図、PL20・21）

調査区南側のV19・W19区に位置し、東側はさらに調査区外へ延びる。平面形は不整長方形で、断面形は弧状となる。規模は、長径4.00m、短径1.50m以上、深さ0.20mである。長軸方位はN－1°－Eを示す。底面は凹凸が顕著である。谷状地形に面した斜面部に構築している。

遺物は出土していない。

SX03（第39図、PL21）

調査区南側のR14区に位置する。南西側は攪乱を受けている。平面形は不整長方形もしくは楕円形で、断面形は弧状となる。規模は、長径4.90m以上、短径2.00m、深さ0.30mである。長軸方位はN－77°－Eを示す。底面は凹凸が顕著である。

遺物は出土していない。

5）　溝

溝は８条検出した。溝の平面形状は、舌状台地の縁辺部を区画するように直線的に延びる一群（SD03・04・05・06・07）と、「く」の字形に屈曲する一群（SD01・02・08）の２種類がある。

SD01（第40図、PL21）

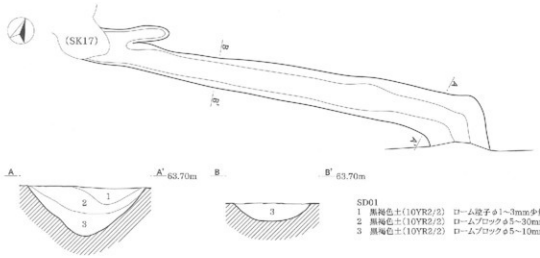
調査区南側のP18・P19区に位置し、南東側はさらに調査区外へ延びる。西側は中世の地下式坑であるSK17を切る。平面形は「く」の字状に屈曲して西から南へ延びており、断面形は弧状から漏斗状となる。規模は、全長11.00m以上、上幅1.00～1.50m、深さ0.50mである。東西辺を基準にした中軸方位はN－80°－Eを示し、東西辺と南北辺は111°の角度で鈍角に屈曲する。底部は若干の起伏はあるが、ほぼ水平で特定方向への傾斜は見られない。

遺物は出土していない。

SD02（第40図、PL21）

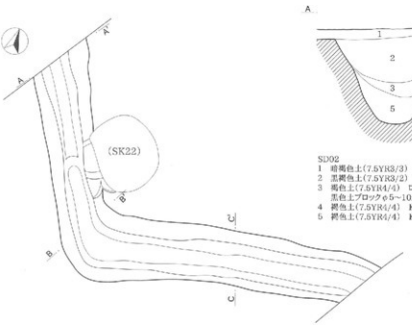
調査区南側のS20・21区に位置し、両端部はさらに調査区外へ延びる。SK22を切る。平面形は「く」の字状に屈曲して北から東へ向かって延びており、断面形は漏斗状となる。規模は、全長13.00m以上、上幅1.40

SD01



SD01
1　黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子φ1～3mm少量，やや硬まる。
2　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロックφ5～30mm多量，やや硬まる。
3　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロックφ5～10mm少量，やや硬まる。

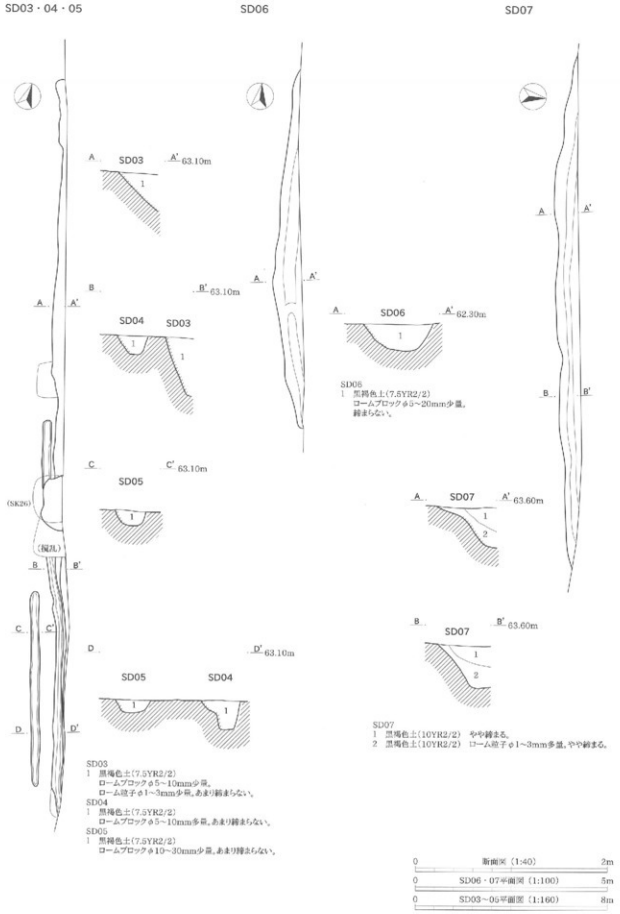
SD02



SD02
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　表土層，焼酎作土。
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　黒色土多量，ローム粒子φ1～3mm少量，締まりなし。
3　褐色土(7.5YR4/4)　ロームブロックφ5～10mm少量。
　黒色土ブロックφ5～10mm少量，締まりなし。
4　褐色土(7.5YR4/4)　KI粒子φ1～3mm大量，締まりなし。
5　褐色土(7.5YR4/4)　KI粒子φ1～3mm少量，締まりなし。

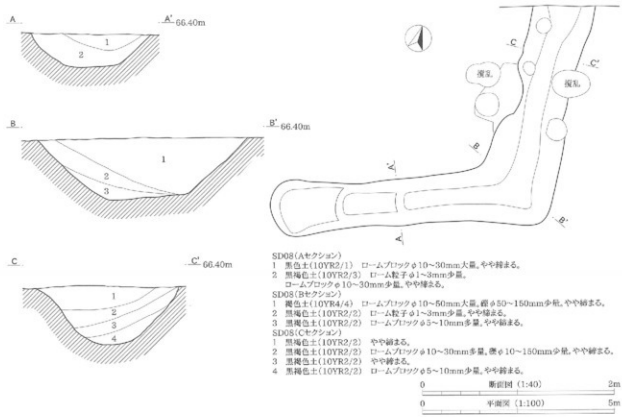
0　断面図 (1:40)　2m
0　平面図 (1:100)　5m

第40図　SD01・02実測図



第41図　SD03～07実測図

SD08



第42図　SD08実測図

~2.00m、深さ1.10mである。東西辺を基準にした中軸方位はN－77°－Eを示し、東西辺と南北辺は108°の角度で鈍角に屈曲する。底部は北から東へ向かってわずかに傾斜している。

遺物は出土していない。

SD03（第41図、PL22）

調査区東側のI123・I23・I24・J24区に位置し、東側はさらに調査区外へ延びる。中世の地下式坑と思われるSK26を切る。平面形は台地縁辺部にあって直線的に延びるもので、断面形は台形状となる。規模は、全長27.50m以上、上幅0.42m以上、深さ0.65mである。中軸方位はN－71°－Eを示す。本溝の西側には、近接してSD04とSD05が併走している。

遺物は出土していない。

SD04（第41図、PL22）

調査区東側のI24・J24・K24区に位置し、南側はさらに調査区外へ延びる。中世の地下式坑と思われるSK26を切る。平面形は直線的に延びるもので、断面形は台形状となる。規模は、全長16.75m以上、上幅0.35~0.40m、深さ0.30mである。中軸方位はN－69°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SD05（第41図、PL22）

調査区東側のJ24・K24区に位置する。平面形は直線的に延びるもので、断面形は台形状となる。規模は、全長8.25m、上幅0.30~0.36m、深さ0.18mである。中軸方位はN－71°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SD06（第41図、PL22）

調査区東側のM24・N24区に位置し、東側はさらに調査区外へ延びる。平面形は台地縁辺部にあって直線的に延びるもので、断面形は弧状となる。規模は、全長9.50m以上、上幅0.74m、深さ0.28mである。中軸方位はN－8°－Wを示す。

遺物は出土していない。

SD07（第41図、PL22）

調査区北側のB16・B17区に位置し、北側はさらに調査区外へ延びる。平面形は台地縁辺部にあって直線的に延びるもので、断面形は台形状となる。規模は、全長13.50m以上、上幅0.64m以上、深さ0.45mである。中軸方位はN－82°－Eを示す。

遺物は出土していない。

SD08（第42図、PL22）

調査区北側のH2・G2区に位置し、北側はさらに調査区外へ延びる。平面形は「く」の字状に屈曲して西から北へ向かって延びており、断面形は台形状となる。規模は、全長11.75m以上、上幅1.20～2.40m、深さ0.65mである。東西辺を基準にした中軸方位はN－72°－Eを示し、東西辺と南北辺は111°の角度で鈍角に屈曲する。底部は西から北へ向かって傾斜しており、西側と北側との比高は0.47mである。

遺物は、覆土中から拳大の円礫20数点のほか、土師器片1点が出土している。

第4章　ま　と　め

本遺跡は、那珂川の支流である緒川の右岸河岸段丘上に立地する縄文時代早期から近世に至る複合遺跡である。遺跡地の標高は62～67mで、調査面積は7,752㎡である。

ここでは、それぞれ時代ごとに調査の成果と問題点を述べてまとめとする。

縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居1軒、土坑1基、屋外炉1基である。いずれも調査区北東側から検出した。出土した遺物は僅かであるが、表採資料を含め、早期から前期に至る資料が得られている。

SI07は平面円形を呈するもので、規模は長径4.30m、短径4.25m、壁高0.10mである。柱穴は検出できなかったが、床面付近から尖底土器や石鏃の未成品などが出土している。出土遺物から早期中葉の田戸下層式期の竪穴住居と考えられる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居12軒、掘立柱建物1棟を検出した。出土遺物は概して少ないが、8世紀後半から9世紀にかけて営まれた集落と考えられる。調査範囲が限られているため、集落の全貌については明らかでないが、遺跡の性格を示唆するような遺物として、墨書土器、多文字・人面墨書土器、仏鉢などが出土している。

墨書土器は、「真岡」（「岡」は異体字）、「□女」、「因」（異体字）などと書かれたものが出土している。このうちSI06から出土した須恵器高台付坏の外底部に書かれた「真岡」の墨書には、唯一、朱墨が使われている。「真岡」の文字が示す意味については不明であるが、当地には「岡原」の字名が残っていることから、地名にかかわるものである可能性も考えられる。

県内で朱墨書土器が多数出土している遺跡として、結城市の笹崎遺跡がある〔松田・斉藤ほか1996〕。方形の柱掘形で直径30cm前後の柱痕跡を持つ掘立柱建物群の存在から官衙的な様相が、三彩陶器（奈良三彩）、「□寺」「□佛申□」と書かれた墨書土器、土製鞭髪などの出土遺物からは寺院的な様相が看取される遺跡である。墨書土器は全部で238点出土しており、このうち朱墨を使ったものは13点で全体の約5.5％を占める。ほかに朱墨が遺存する転用硯が1点ある。笹崎遺跡の例を見る限り、黒墨と朱墨については墨書の内容や墨書部位、出土地点などに差異は見られず、特に使い分けている様子はみとめられないが、当時、貴重品であった朱墨の使用が許されていたこと自体が、遺跡の性格の一端を示唆しているものと思われる。

また、特筆すべき遺物としてSI08から多文字・人面墨書土器が1点出土している。土師器甕の胴部に人面が描かれ、その左側に「□□□鳥［　　］」と見える多文字の墨書が確認できる。ほかにSI08からは須恵器坏の底部に「□女」と書かれた墨書土器が1点出土している。

多文字墨書土器は、千葉県の印旛周辺地域から多数出土しているが、出土した多文字墨書土器に書かれている人名は丈部氏が圧倒的に多いことが知られており、人面の描写のあるなしに関わらず、多文字墨書土器の祭祀には丈部氏が深く関与していることが指摘されている〔高島2009〕。

県内での人面墨書土器の出土例として、石岡市の北の谷遺跡からは土師器甕の胴部に人面と「富［　］」の文字が墨書されものが出土しており、また、同市の前河遺跡からは土師器甕の胴部に人面二面が墨書されものが出土している。さらに、同市の鹿の子C遺跡からは人面墨書土器が10点出土しているが、このうち4号連房竪穴遺構からは人面墨書土器と共伴して「丈里」と書かれた墨書土器が出土している。このことを踏まえて、

久信田喜一氏は「(前略)「丈里」は「丈部里」と推定できるから、墨書人面土器と丈部とが関係することは事実と考えてよいだろう。」〔久信田1996〕としている。

常陸大宮市内の遺跡からも丈部氏関連の遺物として、小中遺跡から「丈」と書かれた墨書土器や「丈」の字の烙印が、小野中道遺跡から「丈永私印」と陽刻された銅印や「□□里丈部里」と筥書きされた平瓦などが出土している。また、「解」の字が記された漆紙文書が出土した源氏平遺跡からは、「□鳥取文功」・「鳥部嶋」と筥書きされた平瓦が確認されており、丈部氏に関連した集落であると考えられている。本遺跡から出土した多文字・人面墨書土器にも「□□□鳥[　　]」の文字が見え、同じ「鳥」の字が使われている点は興味深い。

本遺跡からは、丈部氏との関係を端的に示すような遺物の出土はないが、多文字・人面墨書土器などが出土していることから、本遺跡もまた丈部氏との関連の中でとらえるべき遺跡であろうと考えられる。

中　　世

中世の遺構は、地下式坑12基を検出した。いずれも地下室は単室で、方形となるSK18を除き、基本的に平面形は横長の長方形を呈する。竪坑と地下室の連結部には床面の高さが同じもの（無段）と、段差10cm前後とわずかであるが高さが異なるもの（有段）がある。遺構の東側が調査区外にあって全貌が把握できないSK26を除き、前者にはSK05・10・14・15・17・18・23・27の８基が、後者にはSK12・13・16の３基が該当する。

地下式坑は、調査区東側の台地縁辺部にあるSK26を除き、すべて調査区南側から検出しており、明らかに偏在する傾向が見られる。地下式坑が密集するSK14（Q16区）を中心とするエリアからは合計10基の地下式坑を検出した。同エリアは谷状の地下地形を呈しており、現状ではテフラ層の上面には最厚部（SK14付近）で約2mの黒色土が堆積している。地下室の天井部が遺存しているものはないが、倒壊の状況から見て、上半～天井部はこの黒色土中にあったものと推測される。地下式坑を構築するにあたり、あえて軟弱な地盤であるこのエリアを選んでいることに強い選択性が窺える。

地下式坑の竪坑がどちらの方向を向いているかを示したのが第44図である。調査区東側にあって竪坑が確認できないSK26と、唯一、例外的に反対側を向いているSK12を除き、すべて調査区南側のほぼ中央（S18区付近）を指向している。

近　　世

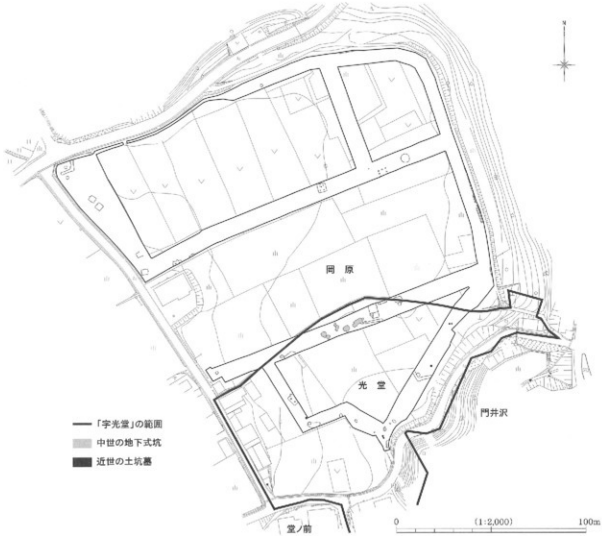
近世の遺構は、座棺を埋葬したと考えられる土坑墓７基である。いずれも調査区南側から検出しており、前述した調査区南側のほぼ中央を弧状に囲むようにして点在している。

本遺跡が立地する段丘面上にある現在の墓地は調査区南東側の小道沿いにある。検出した土坑墓との関係については不明であるが、現存する墓碑に刻まれた江戸時代以前の年号（没年）を見てみると、江戸時代中期の享保15年（1730）と記されているものが最も古く、その後、末期の万延年間（1860～1861）まで断続的に年号が確認できる。

明治28年に作成された『字図』[1]によれば、調査区南側は「野口村大字門井字光堂」となっており、その南西側には「堂ノ前」の字名が見える（第43図）。中世の地下式坑と近世の土坑墓の分布がほぼ「光堂」の字名が示す範囲内にあること、地下式坑の出入口である竪坑の向きが「光堂」の中心部を指向していることなどから、中世から近世にかけて、ここには「光堂」と呼ばれる御堂のような仏教関連施設が存在し、その周囲は墓域として利用されていたと考えられる。

---

1) 常陸大宮市役所御前山総合支所で所蔵している。



第43図　「野口村大字門井字光堂」の範囲(『字図』(明治28年2月調整)による)

第44図　地下式坑の主軸方向

また、帰属時期は不明ながら、調査区南端から井戸を１基（SE01）検出した。通常、段丘面は地下水面が低く、段丘崖の下には豊富な湧水が出ていることが多いことから、段丘面上にあえて井戸を掘ることには特別な意図が感じられる。出土遺物もなく詳細は不明であるが、この井戸が、仏教において仏前などに供養される水（閼伽）を汲むための井戸、つまり「閼伽井」である可能性も考えられよう。

なお、この「光堂」の字名が示す範囲内には、奈良・平安時代の竪穴住居であるSI02があり、仏鉢が１点出土している。遺構の大半が調査区外にあり、周囲の状況もわからないことから多くは言及できないが、このエリアから古代の仏教関係遺物が出土していることは大変興味深い。

【引用・参考文献】

青山俊明　1999「那珂郡東海村表採の縄文時代早期沈線文土器について」『嬉良岐考古』第21号　嬉良岐考古同人会

赤井博之　1998「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（1）～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～」『嬉良岐考古』第20号　嬉良岐考古同人会

浅井哲也　1991「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号　財団法人茨城県教育財団

浅井哲也　1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』２号　財団法人茨城県教育財団

荒井保雄　1996「大宮町下村田遺跡周辺の奈良・平安時代の土器様相について」『研究ノート』６号　財団法人茨城県教育財団

池田晃一　1993「西茨城郡七会村山の田遺跡出土の縄文土器及び石器について」『研究ノート』３号　財団法人茨城県教育財団

石田茂作監修　1976『新版仏教考古学講座 第５巻 仏具』雄山閣出版

茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会　2011『茨城県考古学協会シンポジウム資料集 茨城中世考古学の最前線～編年と基準資料～ 第１・２分冊』茨城県考古学協会

茨城県史編集委員会監修　1985『茨城県史 原始古代編』茨城県

茨城県立歴史館　1995『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県

茨城県立歴史館史料部編　2006『茨城県立歴史館史料叢書９ 茨城の縄文土器』茨城県立歴史館

遺物調査技術研究室・松井　章編　2006「動物考古学の手引き」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

江戸遺跡研究会　2000『江戸文化の考古学』吉川弘文館

江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

岡本東三ほか　1994『域ノ台南貝塚 発掘調査報告書』千葉大学考古学研究室

小川和博・佐藤政則　2009『鹸子遺跡 発掘調査報告書』日立市文化財調査報告書第82集　有限会社日考研茨城

小川正忠・竹原秀雄　2002『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所

金井　豊・坂本　亨・安藤　厚　1988「関東平野北東部における第四紀後期テフラの上成分及び微量成分組成」『地質調査所月報』第39巻第12号　地質調査所

川井正一・白井正子　2008「茨城県域における文字資料集成10」『埋蔵文化財部 年報28』財団法人茨城県教育財団

久保田喜一　1996「古代の文字」『郷土茨城の歴史』ぎょうせい

斉藤弘道　2000「茨城県内出土の沈線文系土器の集成的検討（４）」『嬉良岐考古』第22号　嬉良岐考古同人会

佐々木義則　1989「木葉下窯跡群出土坏・蓋類の法量分化について」『嬉良岐考古』第11号　嬉良岐考古同人会

佐々木義則　1992「茨城北部における供膳土器の器種構成」『嬉良岐考古』第14号　嬉良岐考古同人会

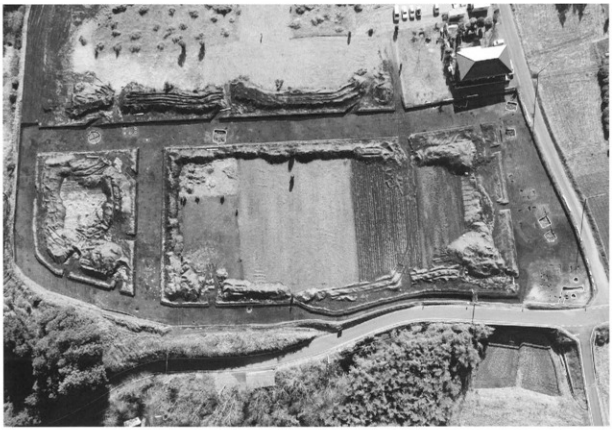
佐々木義則　1995「木葉下窯跡群産杯Ａⅰの変化について－消費地における形態と調整技法の様相－」『嬉良岐考古』第17号　嬉良岐考古同人会

佐々木義則　1998「常陸におけるロクロ成形土師器坏の展開－古代久慈・那賀・倉太の三郡を中心として－」『嬉良岐考古』第20号　嬉良岐考古同人会

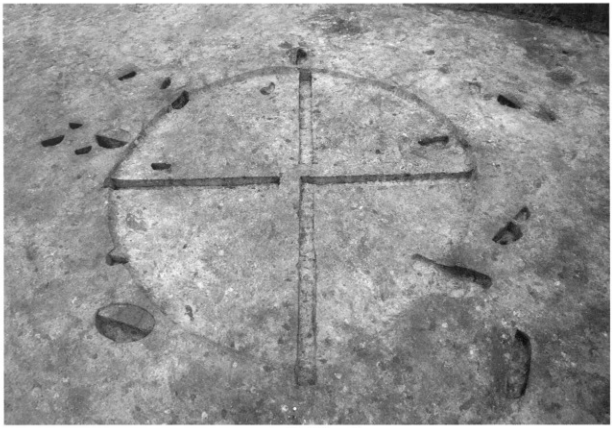
佐々木義則　1999「茨城県北半部における土師器椀の形式変遷」『婆良岐考古』第21号　婆良岐考古同人会
佐々木義則　2001「茨城県における8・9世紀の須恵器窯構造」『婆良岐考古』第23号　婆良岐考古同人会
佐々木義則　2002「武田西塙遺跡 奈良・平安時代編」財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第24集　財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
佐々木義則　2007「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層－瓦吹堅先生還暦記念論文集』　瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会
佐々木義則　2009「武田遺跡群における平安時代土師器坏・小皿編年」『婆良岐考古』第31号　婆良岐考古同人会
白田正子　1997「茨城県における中世末から近世にかけての土師器内耳土器について－つくば市古屋敷遺跡の出土例を中心にして」研究ノート』7号　財団法人茨城県教育財団
鈴木公雄　1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
高島英之　2009「古代印播と多文字墨書土器」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』高志書院
中世土器研究会　2004『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
東国中世考古学研究会編　2009『中世の地下室』高志書院
奈良・平安時代研究班　1991「8世紀末～9世紀前半の器種構成について」『研究ノート』創刊号　財団法人茨城県教育財団
奈良・平安時代研究班　1992「9世紀後半の器種構成とその割合について」『研究ノート』2号　財団法人茨城県教育財団
奈良・平安時代研究班　1993「10世紀の器種構成とその割合について」『研究ノート』3号　財団法人茨城県教育財団
吹野富美夫　1993「茨城における縄文時代早期終末から前期初頭土器群について」『研究ノート』3号　財団法人茨城県教育財団
松井　章　2008『動物考古学』京都大学学術出版会
松田政基・斉藤伸明ほか　1996『峯崎遺跡』結城市文化財発掘調査報告第7集　結城市教育委員会
水澤幸一　1996「中世越後の鉦鼓」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
三輪茂雄　1994『石臼の謎』クオリ

写　真　図　版

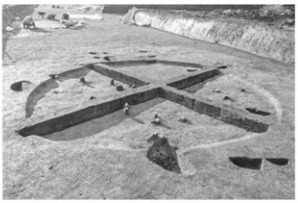
調査区南側全景（北西上空から）



調査区北側全景（北上空から）

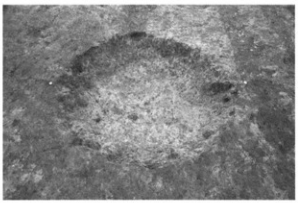


SI07 完掘（南東から）



SI07 セクション（東から）

SK28 セクション（北東から）



SK28 完掘（東から）

FP01 全景

SI01 全景（南西から）

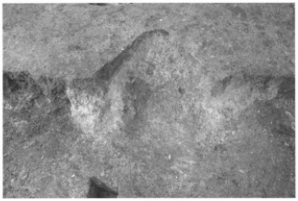
SI01 カマド全景（南西から）

SI01 遺物出土状況（北東から）

SI01 セクション（南から）

SI01 完掘（南西から）

SI02 全景（南東から）



SI02 カマド全景（南東から）

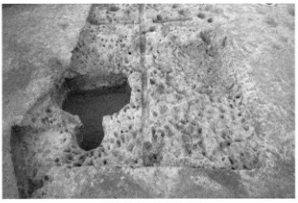
SI02 遺物出土状況（南東から）

SI02 セクション（南から）

SI02 完掘（南東から）

SI03 全景（南から）

SI03 カマド全景（南から）



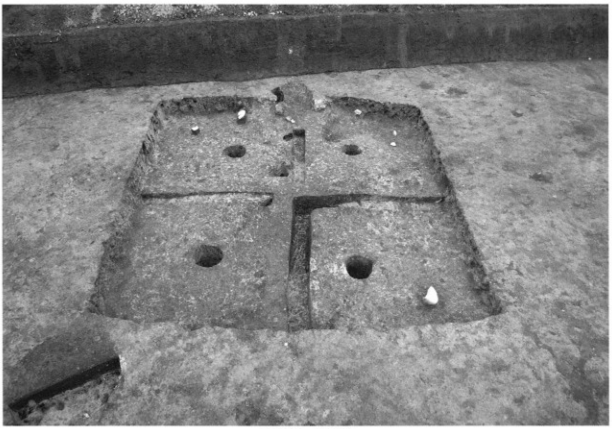
SI03 完掘（南から）

SI04 セクション（東から）

SI05 セクション（東から）

SI04 完掘（北東から）

SI05 完掘（南から）



SI06 全景（南から）

SI06 カマド全景（南から）

SI06 遺物出土状況（南東から）

SI06 セクション（南東から）

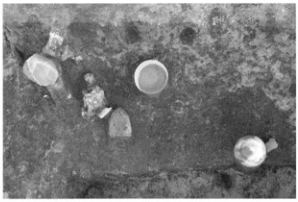
SI06 完掘（南から）

SI08 全景（東から）

SI09 完掘（北から）

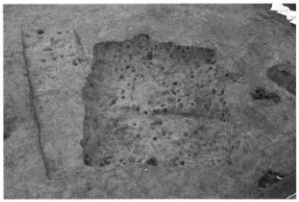
SI10 全景（西から）

SI10 カマド全景（西から）

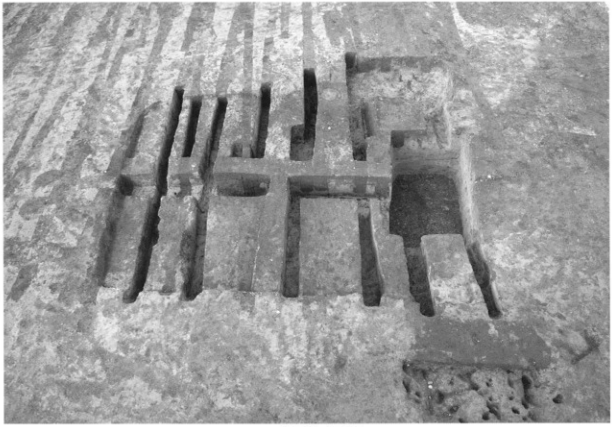


SI10 遺物出土状況（西から）

SI10 セクション（北西から）



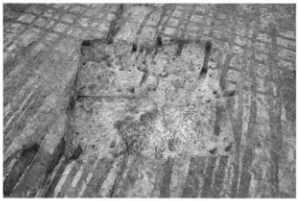
SI10 完掘（西から）



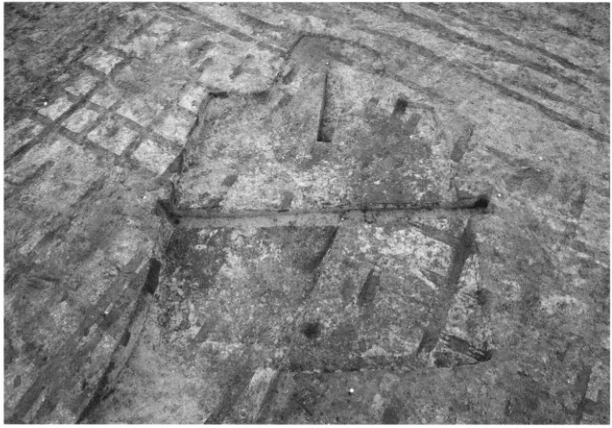
SI11 全景（南東から）

SI12 全景（南東から）

SI12 カマド全景（南東から）



SI12 完掘（南東から）

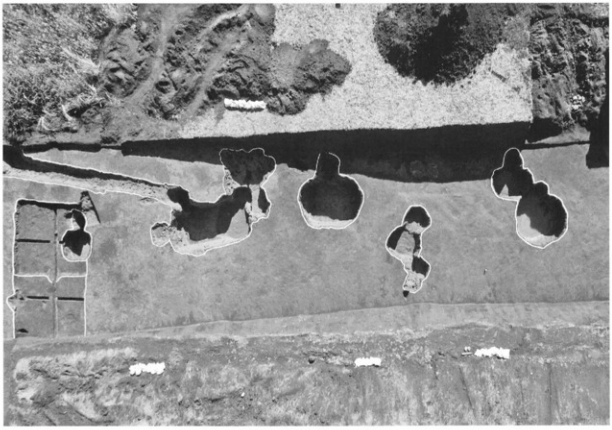


SI13 全景（南東から）

SI13 完掘（南東から）

SB01 完掘（北西から）

地下式坑群全景（北東から）



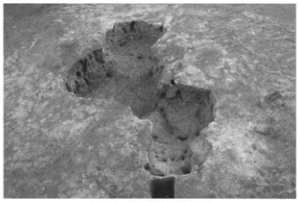
地下式坑群全景（北上空から）

SK05 完掘（東から）

SK05 セクション（北から）

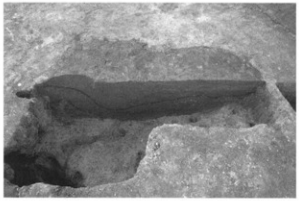
SK10 完掘（北西から）

SK10 セクション（北から）

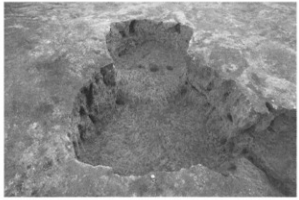


SK12・13 完掘（北から）

SK12 完掘（南から）



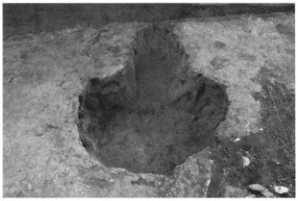
SK12 セクション（東から）



SK13 完掘（北から）

SK13 セクション（南東から）

SK14・18 完掘（南東から）



SK14 完掘（北から）

SK14 セクション（東から）

SK15 完掘（南から）

SK15 セクション（南西から）

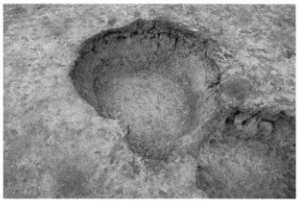
SK16・17・23 完掘（北から）

SK16 完掘（北から）

SK16 セクション（北東から）

SK17 完掘（北西から）

SK17 セクション（南西から）



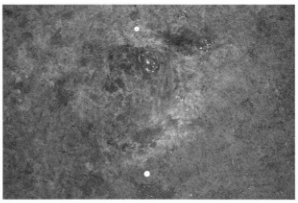
SK18 完掘（南東から）

SK18 セクション（西から）

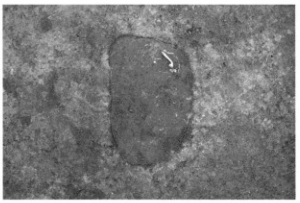
SK23 完掘（北から）

SK26 完掘（南西から）

SK27 完掘（北西から）



SK02 全景（北東から）



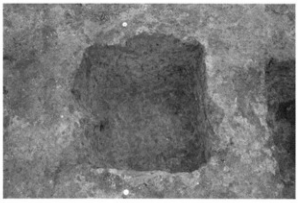
SK02 検出状況（北東から）

SK02 セクション（北から）

SK03・04 完掘（北東から）

SK03 全景（北東から）

SK03 セクション（北西から）



SK04 完掘（北東から）

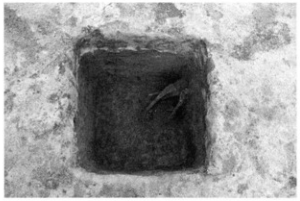
SK04 セクション（北西から）

SK07 全景（南東から）

SK07 セクション（南東から）

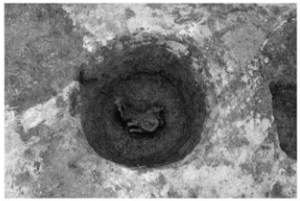
SK19 全景（南東から）

SK19 セクション（南東から）



SK20 全景（南東から）

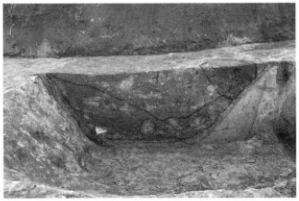
SK20 セクション（南東から）



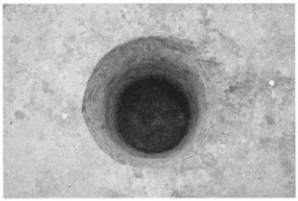
SK21 全景（西から）

SK21 セクション（西から）

SK01 全景（北から）



SK01 セクション（北から）

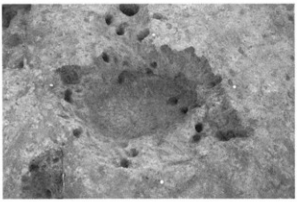


SE01 全景（北西から）

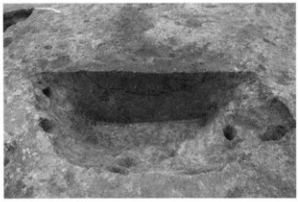
SE01 セクション（北西から）

SK06 完掘（南西から）

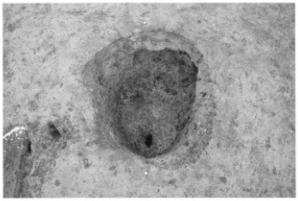
SK06 セクション（北西から）



SK08 完掘（北東から）



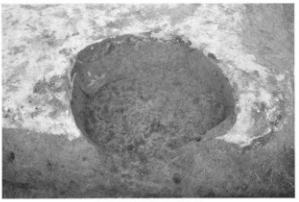
SK08 セクション（北東から）



SK09 完掘（東から）

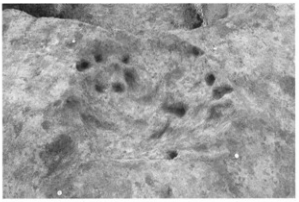
SK09 セクション（北から）

SK11 完掘（南西から）



SK22 完掘（南西から）

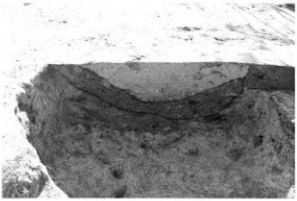
SK22 セクション（南西から）



SK24 完掘（北東から）

SK24 セクション（南東から）

SK25 完掘（南東から）

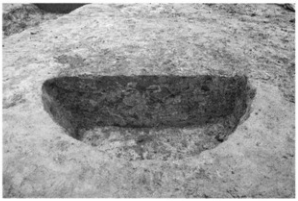


SK25 セクション（北から）

SK29 完掘（北東から）

SK29 セクション（北東から）

SK30 完掘（北東から）



SK30 セクション（北東から）

SX01 全景（西から）

SX01 セクション（西から）

SX02 全景（南西から）

SX02 セクション（南から）

SX03 全景（東から）

SX03 セクション（西から）

SD01 完掘（東から）

SD01 セクション（西から）

SD01 セクション（西から）

SD02 完掘（東から）

SD02 セクション（南東から）

SD03・04・05 完掘（南から）

SD06 完掘（南から）

SD07 完掘（東から）

SD07 セクション（東から）

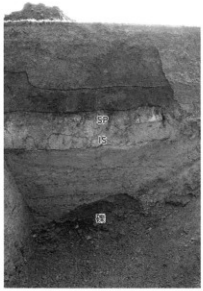
SD07 セクション（東から）

SD08 完掘（西から）

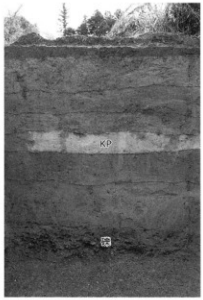
SD08 セクション（北東から）

SD08 セクション（南から）

TP01 セクション（北から）

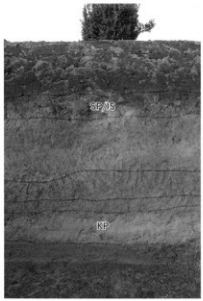


TP02 セクション（北から）

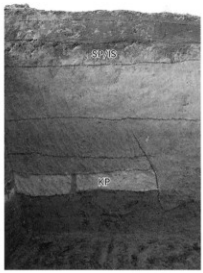


TP03 セクション（北から）

TP04 セクション（南から）



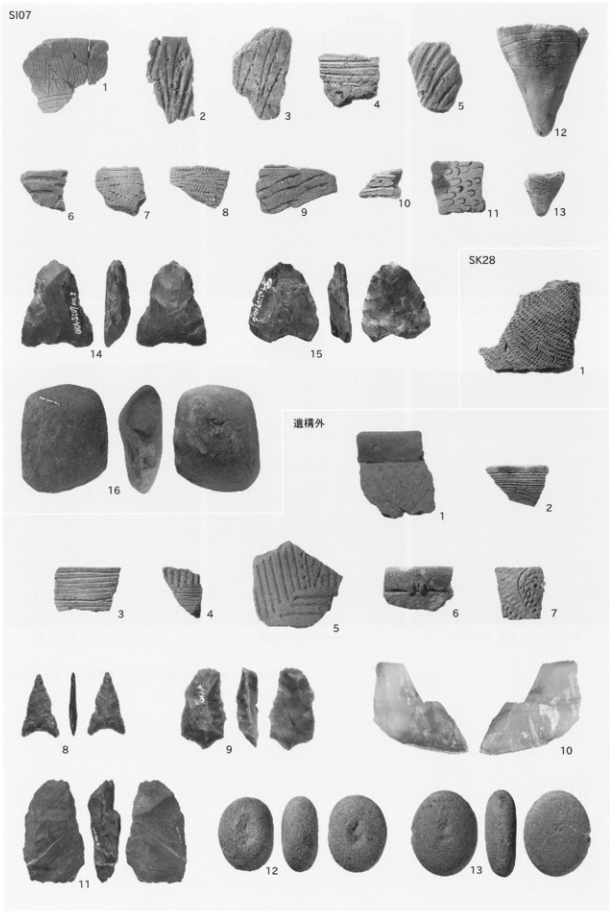
TP05 セクション（南から）



TP06 セクション（南から）

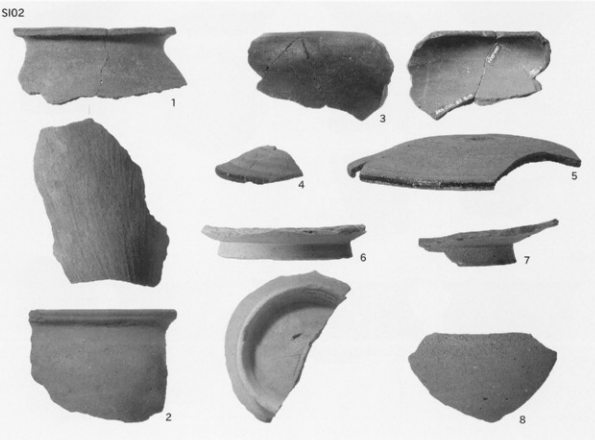
※ SP：七本桜軽石層、IS：今市軽石層、KP：鹿沼軽石層、段：段丘礫層

PL24

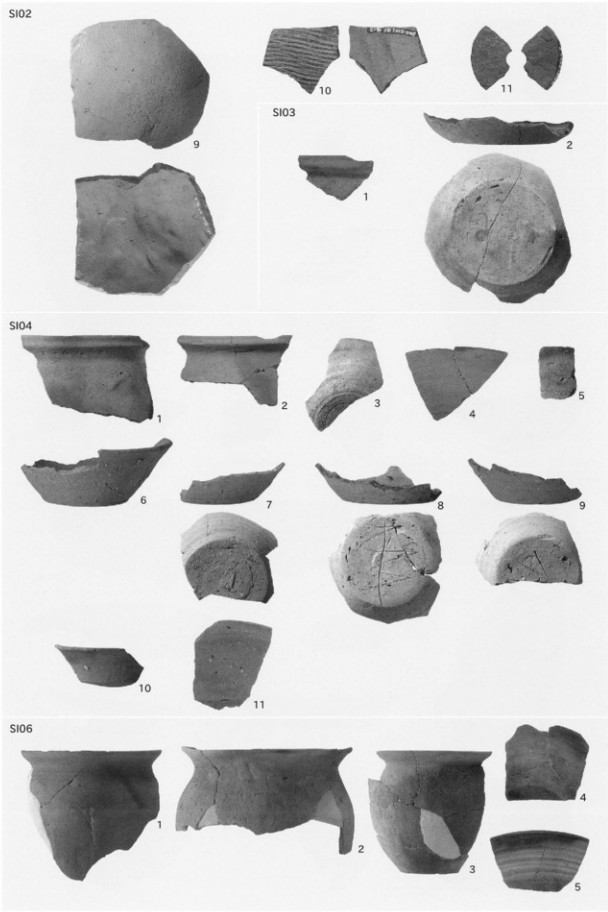

SI07
1
2
3
4
5
12
6
7
8
9
10
11
13
14
15
SK28
1
16
遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

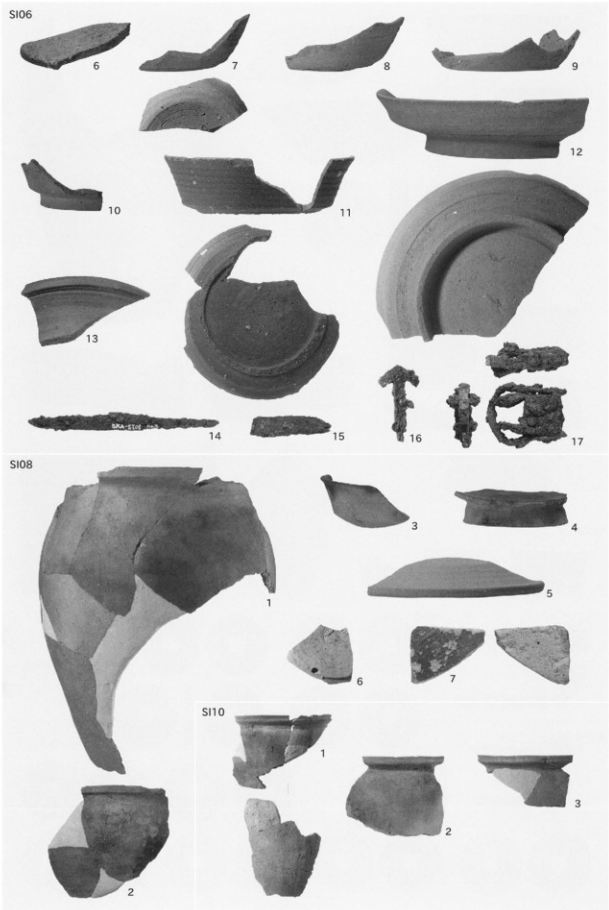
SI01

SI02

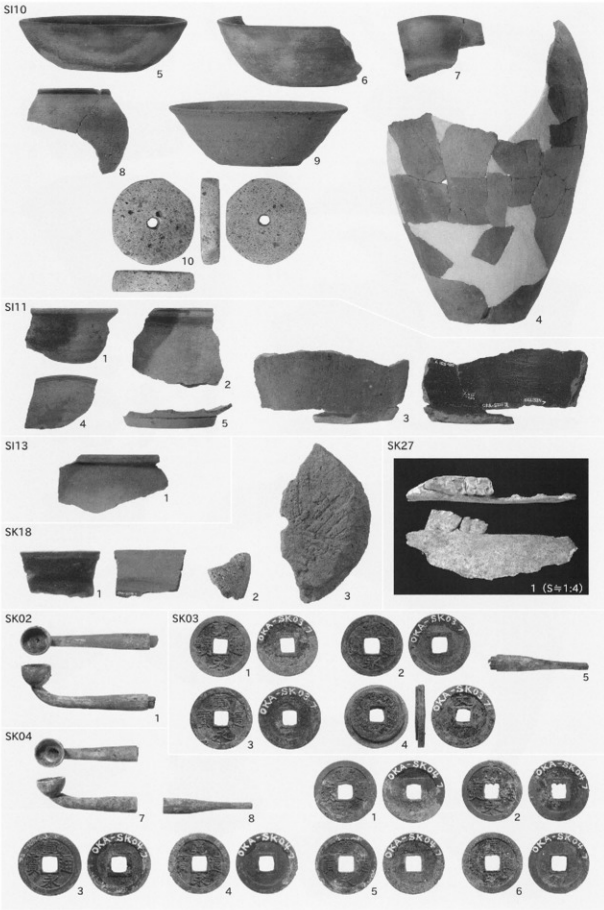


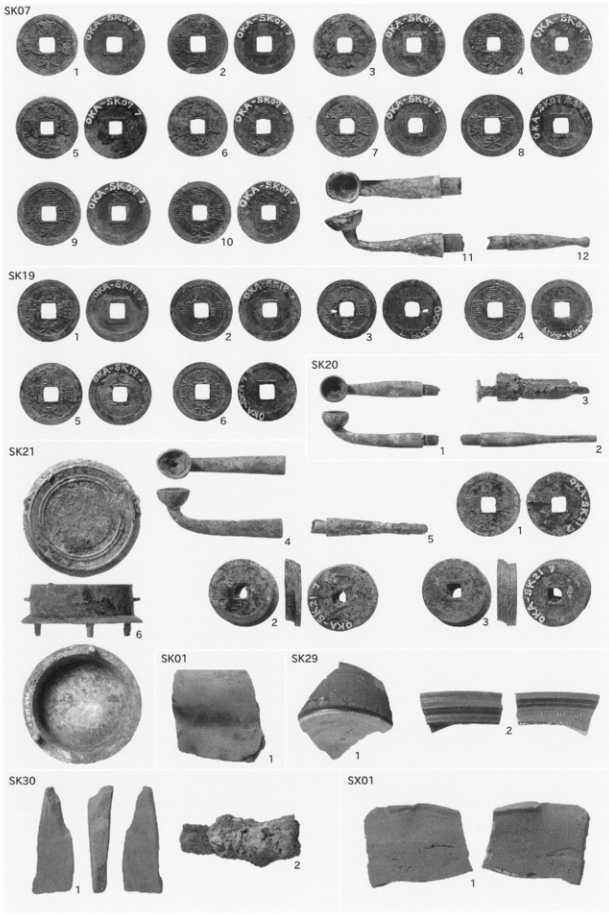
PL26




SI06
6
7
8
9
12
10
11
13
14
15
16
17
SI08
1
3
4
5
6
7
2
SI10
1
2
3

PL28




SK07
SK19
SK20
SK21
SK01
SK29
SK30
SX01

報告書抄録

ふりがな	おかはらいせき
書名	岡原遺跡
副書名	中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	濵原勝美　秋山泰利（以上、株式会社ノガミ）　後藤俊一（常陸大宮市教育委員会）
編集機関	常陸大宮市教育委員会　株式会社ノガミ
所在地	〒319-2292　茨城県常陸大宮市中富町 3135-6　TEL 0295（52）1111　常陸大宮市教育委員会 〒950-1136　新潟県新潟市江南区曽川甲 527 番地 3　TEL 025（280）6620　株式会社ノガミ
発行年月日	西暦 2011（平成 23）年 3 月 22 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
岡原遺跡	茨城県常陸大宮市門井79番地の1外38筆	08225	御073	36度 34分 10秒	140度 20分 05秒	20101018～ 20110107	7,752 ㎡	中山間地域総合整備事業

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡原遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居1軒、土坑1基、屋外炉1基	縄文土器、石器	早期（田戸下層式）の竪穴住居を検出
	集落跡	奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀）	竪穴住居12軒、掘立柱建物1棟	土師器、須恵器、石製品、鉄製品	多文字・人面墨書土器（「口口口当［　］＋人面）、墨書土器（「真岡」・「口女」・「河」）、仏鉢などが出土
	その他	中　世	地下式坑12基	内耳土鍋、石臼	
	その他	近　世	土坑墓7基	人骨、寛永通宝、煙管、伏鉦	
	その他	時期不明	井戸1基、粘土貼り土坑1基、土坑10基、竪穴状遺構3基、溝3条		

要約

本遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代では、早期の田戸下層式期の竪穴住居を1軒検出した。奈良・平安時代では、8世紀後半から9世紀にかけての集落を検出した。集落内からは祭祀に使われたと見られる多文字・人面墨書土器などが出土しており、太郎氏との関連性が想起される。中・近世では、地下式坑と土坑墓を検出したが、いずれも調査区南側の「光堂」の字名が残る範囲内に位置している。同地区は、中世段階から「光楽」と呼ばれる御堂を中心に墓域として利用されていた可能性がある。

岡 原 遺 跡

中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月18日印刷
平成23年3月22日発行

編集・発行　常陸大宮市教育委員会
〒319-2292　茨城県常陸大宮市中富町3135-6
電話　0295（52）1111

株式会社ノガミ
〒950-1136　新潟県新潟市江南区曽川甲527番地3
電話　025（280）6620

印刷・製本　株式会社 ライフ
〒286-0134　千葉県成田市東和田595
電話　0476（24）1564